

Social Platform Academy

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

1. 企画概要

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

1 | 開催趣旨 | Purpose

本アカデミーは、「社会を構造ではなく関係性から再構築する」という理念のもとに構想されたソーシャルプラットフォーム構想（Social Platform）の実践型プロトタイプである。

SPO（Social Platform Organization）が描くのは、制度でも市場でもない第三の社会基盤を、人と人との“あいだ”から立ち上げていく構想であり、SPA（Social Platform Academy）はその思想を具体化し、検証し、関係性を耕す場として試行される共育のプロセスモデルである。

SPAは、SPOの中核をなす「問い・共鳴・継承」のサイクルを体験的に実装するための最初のフィールドであり、今後全国的に応用・展開されうるフォーマットの起点となる。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

Social Platform Organizationの位置付け

SPA (Social Platform Academy) は、SPO (Social Platform Organization) 構想が掲げる「関係性による社会再構築」という理念を、現場において具体的に体験・検証するプロトタイピングの場である。

構想 (SPO) と実装 (地域社会) を接続する“関係性の実験装置”として設計され、個人の問いを起点に、人と人、地域と地域、制度と生活をゆるやかに接続していくことを目指している。

SPAは、SPOが提唱する“共鳴型社会”の原理を、3日間の共育的対話を通じて実感し、可視化し、持ち帰るプロセスに変換する装置である。多様な地域や主体が集い、実践と思想、経験と問いが交差するなかで、“共に育つ学び”＝共育の場として立ち上がっていく。

SPAは、日本的な「縁側」的空間の思想——すなわち、内から見た外と、外から見た内が、ゆるやかに交差し、関与し合う場——を現代的に再解釈し、共創と創発が自然に芽吹く関係の場＝めぶき場として設計されている。SPAは、思想と実践の循環を耕し、未来の社会における「学び」と「つながり」のあり方を問い直す出発点である。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

2 | コンセプト | Concept

Talk. Trust. Transform. Dialogue makes society.

対話から共創へ。そして、関係から社会へ。

SPA (Social Platform Academy) は、「話すため」でも「学ぶため」でもない。

社会の構造そのものを編みなおすための、問いと関係性の実験場である。

参加者一人ひとりが、自らの問いを持ち寄り、語り、聴き合い、内省を通じて言葉を紡ぎ、他者と交差するなかで、関係性を再構築していく。

このプロセスは、実践者による語り（ケース発表）、多視点による拡張対話、

そして参加者全員による内省と記述（SPAタイム）という三段構成によって設計されている。

SPAタイムで言語化された「問い」や「気づき」は、デジタル上に投稿され、AIによる解析を通じて「集合意識」として可視化される。

可視化された集合知は、再び対話の起点となり、学びと変容の循環を生み出していく。

SPAは、「問い・つながり・言語化・可視化・プロトタイピング」という知の連鎖を通じて、

人と人の“あいだ”を丁寧に編み直し、関係性そのものを社会資本として耕しなおす場である。

これは一過性のイベントではない。問いを起点に、社会の未来を再設計する“もうひとつの学びのプロトタイプ”である。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

イベント概要

項目	内容
イベント名	第1回 Social Platform Academy（SPA） in 会津若松
開催日程	2025年11月18日（火） 13:00 ～ 11月20日（木） 12:30（2泊3日）
会場	ヒューマンハブ天寧寺倉庫（HHT）
主催	Social Platform Organization（SPO）実行委員会
共催	本田屋本店（有）、（一社）前橋まちなかエージェンシー、（一社）dialogue
協力	日本通信株式会社、QON株式会社、
企画・運営	Social Platform Organization（SPO）実行委員会
対象者	地域実践者／自治体関係者／企業／研究者／NPO／学生／生活者ほか 問いを持ち寄る意思のある全共鳴者（定員：50名程度）
参加費	無料（※現地までの交通費・宿泊費・食費の一部は各自負担）
アウトカム	1.全国でまちづくりに取り組む実践者同士のつながり 2.参加者の問いの言語化と集合知の可視化 2. 地域実践の構造知化と接続可能性の発掘 3. SPAフォーマットのプロトタイピングと地方展開への可能性

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

3 | プログラム構成 | Program Structure（全体像）

Day 1 | 問いをひらく | 11月18日（火）

問いの「感覚的」共有と関係性の土壌づくり

時間帯	内容	意図
13:00–14:00	開場・空間体験（HHTツアー・展示・語りの余白）	身体と空間を通じた初期接触・緊張のほぐし
14:00–15:30	オープニングダイアログ 「なぜいま、SPOか？」	SPO構想の思想的背景と現代性を共有
15:40–18:00	ダイアログワークショップ	SP構想の根幹をなす関係性の構築
18:00–	懇親会（自由参加）	SP構想の根幹をなす関係性の構築

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

3 | プログラム構成 | Program Structure（全体像）

Day 2 | 共創を編む | 11月19日（水）

問いの「構造的」深掘りと集合知の視覚化

時間帯	内容	意図
09:00–09:30	朝のウォームアップ 問いの再提示	昨日の「問い」を再確認し本日への集中へ
09:30–11:30	Engawa dialogue；Session①	「うち」と「そと」とえんがわ
11:30–13:00	昼食・自由交流・東山街歩き	余白と関係構築、感覚のリセット
13:00–15:00	Engawa dialogue；Session②	「かん」と「みん」とえんがわ
15:00–15:30	休憩・チルタイム（焚き火／屋外対話も可）	SPAらしい時間軸の“抜け”設計
15:30–17:30	Engawa dialogue；Session③	「きおく」と「みらい」とえんがわ
17:30–18:00	ギャザリング・自由対話（問いから話す時間）	誰と、何を、どこで語るかを自分で選ぶ
18:00–21:00	ナイトセッション 「音・風景・詩」の身体的対話＋リレートーク	言語と感覚の往復で総括を身体で受け止める

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

3 | プログラム構成 | Program Structure（全体像）

Day 3 | 社会を耕す | 11月20日（木）

問いの「未来的」編集と次の共創への接続

時間帯	内容	意図
09:00–10:30	クロージングセッション 「問いの地図」をともに描く	前日までの集合知と、自分の問いの現在地を可視化
10:30–11:30	種まきセッション 「次の実験者をどう育てるか」	SPAローカル化や続編構想の種を場を開く
11:30–12:30	自由対話 + 軽昼食 + 解散	“予定されざる偶然”の時間を残して閉じる

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

4 | 協力団体

団体名	内容
日本通信株式会社	協賛
クオン株式会社	現物協賛（ファンコミュニティクラウド）
株式会社関美工堂	会場提供／参加者向けお土産提供（NODATE）
有限会社本田屋本店	参加者向けお土産提供（米でいいの田 ^ん ／ポンせん）
株式会社SATORU	参加者向けお土産提供（花泉口万ドレッシング）
農業法人有限会社自然農法無の会	イベント内食品提供（お米／甘酒）
合同会社SCOP	参加者向けお土産提供（鍋敷き／箸置き）

2. 実施概要

DAY 1

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 1 – 1 オープニングダイアログ「なぜいまSPOなのか」

登壇者 谷川じゅんじ（スピーカー）

島田由香（パネラー）、橋本薫（パネラー）、本田勝之助（ファシリテーター）

SPO / SPAとは何か：関係性による社会再構築の実験

SPA（Social Platform Academy）およびその背景にあるSPO（Social Platform Organization）構想は、既存の社会システムや教育構造へのアンチテーゼであり、対話と共鳴を通じて新たな社会秩序を形成するための実験的プラットフォームである。

1. 基本定義：共鳴と社会実験の場

SPAは、一般社団法人dialogueが主催する3日間の対話プログラムであり、単なる学びの場（セミナーやスクール）ではない。行政、民間企業、研究者など多様な背景を持つ人々が集い、「社会を構造ではなく、関係性から再構築できるのか」という問いを体現するための「社会実験」である。SPAはSPO構想の「プロトタイプ（試作品）」として位置づけられており、完成された解を提供するのではなく、失敗を許容しながら改善を繰り返すアジャイルなプロセスそのものを指す。

2. 核心思想：構造から関係性へ

SPO/SPAの根本には、現代社会における「手触り感の喪失」や「疎外」への対抗がある。

- ・ **構造ではなくプロセス**：社会を固定的な「構造」や制度として捉えるのではなく、ホワイトヘッドの過程哲学のように「関係性の動的な生成プロセス」として捉え直す。
- ・ **メタファーとしてのメトロノーム**：32個のメトロノームが台の揺れによって自然と同期する物理実験を社会のメタファーとする。中央からの強制的な指令（トップダウン）がなくとも、対話や予期せぬ問いといった適度な「揺らぎ」があれば、バラバラな個人の間に自発的な秩序（共鳴）が生まれるという思想に基づく。

3. 運営設計：非対称性の解消と「共育」

SPAの設計思想は、従来の教育システムにおける「教える／教えられる」という非対称な権力関係を否定する。

- ・ **全員が先生、全員が生徒**：参加者全員が教師であり、同時に生徒である「共育（きょういく）」の場と定義される。登壇者も参加者からの問いに学び、参加者もまた互いの経験から学ぶ対等な関係性が重視される。
- ・ **実践・編集・共有のサイクル**：「実践（Action）→編集（Reflection）→共有（Sharing）」のサイクルを高速で回すことで、知識を体系化し、新たなモデルを共創する。

4. 空間と時間の設計：縁側と余白

物理的な環境や時間の使い方も、SPO/SPAの重要な構成要素である。

- ・ **縁側（Engawa）の思想**：会場となる「ヒューマンハブ天寧寺倉庫」に象徴されるように、内と外の境界が曖昧な「縁側」のような空間設計を採用する。これにより、属性や役割を超えた偶発的な出会いや「越境」を促進する。
- ・ **予感と余韻**：厳密なカリキュラムよりも、余白のある時間を意図的に配置し、参加者が「予感」や「余韻」を感じられるよう設計されている。これにより、効率性（時計的時間）ではなく体験的な時間（持続）を重視する。

5. 目的：関係性の資本化と「通電」

最終的な目的は、単なるネットワークの拡大（名刺交換的な接続）ではなく、「関係性の質」を高めることにある。

- ・ **通電（Flow）**：コンセントを挿すだけでなく、実際に電気が流れる「通電」した状態を目指す。共に悩み、行動することで初めて生まれる深い関与を重視する。
- ・ **社会関係資本の形成**：異なる背景を持つ人々をつなぐ「橋渡し型」の社会関係資本を形成し、それを将来的な協働やイノベーションの基盤（資本）とすることを目指す。

以上のように、SPO/SPAとは、制度疲労を起こした現代社会において、人間的な「関係性」と「対話」を起点に、自律的かつ持続可能な社会秩序を再構築しようとする運動体であると言える。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 1 – 1 オープニングダイアログ「なぜいまSPOなのか」

登壇者 谷川じゅんじ（スピーカー）

島田由香（パネラー）、橋本薫（パネラー）、本田勝之助（ファシリテーター）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 1 – 1 オープニングダイアログ「なぜいまSPOなのか」

登壇者 谷川じゅんじ（スピーカー）

島田由香（パネラー）、橋本薫（パネラー）、本田勝之助（ファシリテーター）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 1-2 ダイアログワークショップ

登壇者 島田由香（ファシリテーター）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 1-2 ダイアログワークショップ

登壇者 島田由香（ファシリテーター）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 1 – 3 懇親会



DAY 2

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 Engawa dialogue

SPAには、全国でまちづくりに取り組む実践者が集まっています。
しかし一言に「まちづくり」と言っても、どの地域にも通用する正しい答えはありません。

地域が抱える課題は言語化すると同じ表現かもしれませんが、それぞれ似て非なるものであり、
その地域で活動する上で関わってくるステークホルダーも、組織は似ていても決して同じ人間はいません。
実践者は、自分たちでその課題と向き合い、その解決に向けて答えを模索していくのです。

SPAでは、各自の直面する課題の糸口を見つけるために、「ENGAWA（縁側） dialogue」を実践します。
家の中と外がゆるく混じり合う「中庸」の場としての縁側。

3つのテーマごとに、2つの異なる視点とその間の縁側を考えながら、
各地域が直面する課題を個人が立体的に捉えることで、これまで見えていなかった糸口が見つかるかもしれません。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

ENGAWA dialogue のテーマ

Session 1 「うち」と「そと」とえんがわ

- コロナ禍を経て、都市と地域間のヒトモノコトの流動性や関心が高まってきている。
- まちづくりに必要な”巻き込み力”とは。そして都市部人材は何を目指して地域に越境するのか。

Session 2 「みん」と「かん」とえんがわ

- 各地域の課題は深刻化しており、関係者が一体で課題と対峙していかなければいけない状況。
- 公共の役割とは。民間の役割とは。まちづくりに向けた連携の在り方とは。

Session 3 「きおく」と「みらい」とえんがわ

- 日本の各地で息づく地域資源やその中で形成された文化の価値を再定義する。
- そのために未来に継承するためにいまできることとは。未来に活用すべき手段とは。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

ENGAWA dialogue の時間の過ごし方

Part 1 実践者からの話題提供（15分×2）

- 立場の異なる2名の話者から自身の実践内容を発表
- その中での「共通点」と「違い」を通して、テーマを立体的に捉える

Part 2 話題に対するパネルディスカッション（1時間）

- Part1の内容や設定されたテーマに対して、双方の立場を意識しながら深掘りする
- 答えを探すのではなく、問いを参加者に投げかけ続ける。

Part 3 デジタルグラレコによるセッションの可視化（10分）

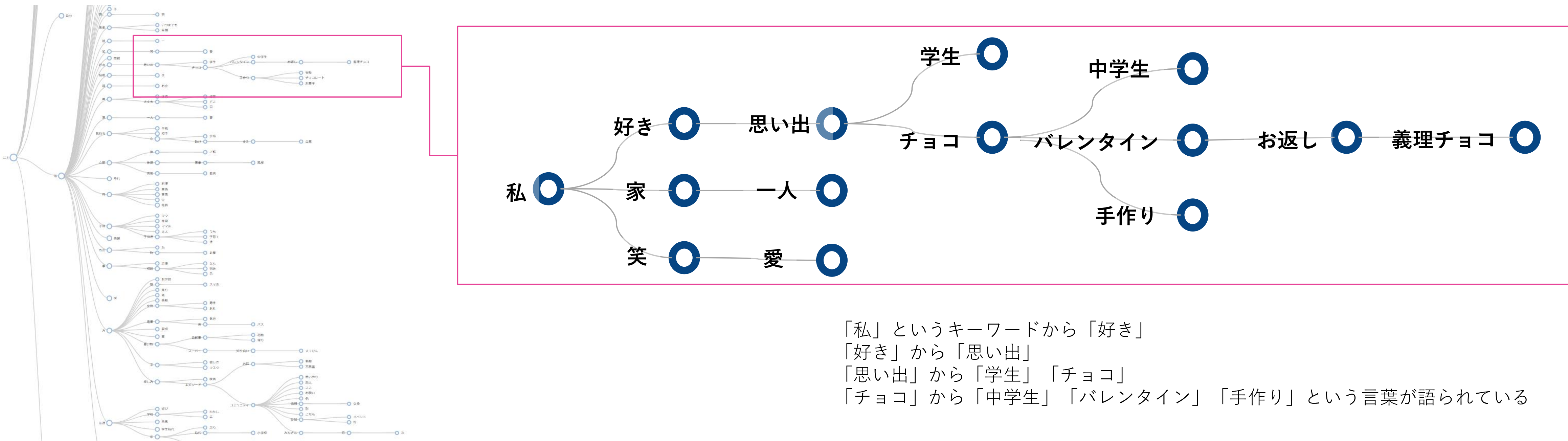
- Part 1～2の内容を可視化されたグラレコを利用しながらパネラーと振り返る
- 自分の視点だけでなく他者の視点を意識することでPart 4の内省の深度を高める

Part 4 個人単位での自己対話と言語化（20分）

- 自分のまちづくりで直面する課題に対して解決策の仮説を立てる
- 問いと仮説を繰り返しながら言語化のプロセスを回し、それを集合知のかけらにする

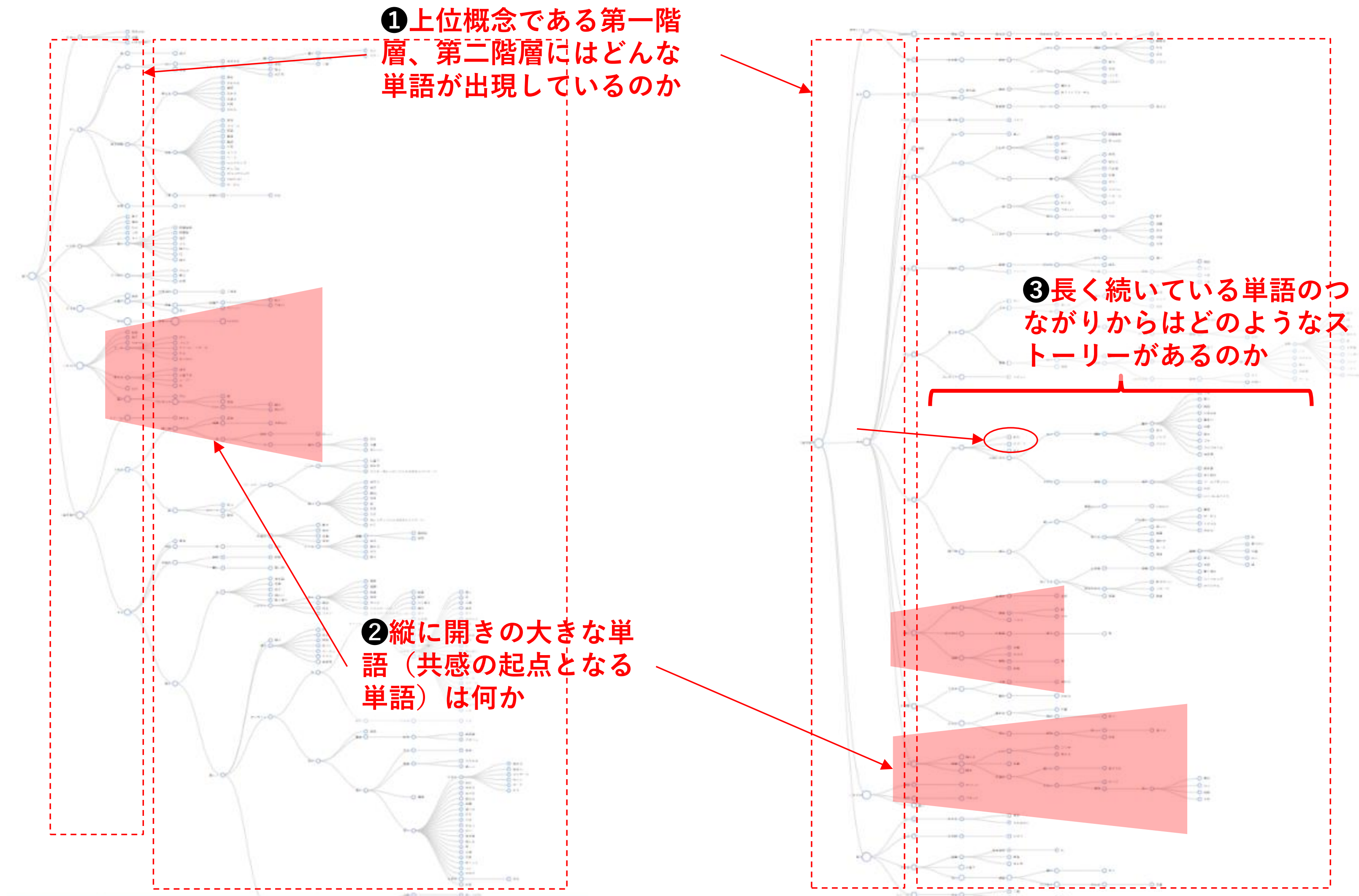
コミュニティに生じる大量の対話データを、共起アルゴリズムが読み込みます。
それぞれの発言に含まれる単語と単語の出現頻度を計算し、意味内容の距離に置き換えて、
コメントに含まれる**キーワードの共起構造から人の背景**を描写できます。

共起モデル＝ユーザーの物語の背景



- ・ カテゴリ（世代・関心・利用状況等）別にどのように語られているのかを紐解く（生活・価値観の背景）

トライブ（グループ）ごとの特徴（異なる点、共通点）を確認していくことで、
その差異を浮き彫りにしていきます。



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 1 Engawa dialogue ; Session① 「うち」と「そと」とえんがわ

登壇者 株式会社風と土と 阿部裕志 / 一般社団法人越境イニシアチブ 原田未来
島田由香（ファシリテーター） / 柳川舞（パネラー） / 児浦良裕（パネラー）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 1 Engawa dialogue ; Session① 「うち」と「そと」とえんがわ

登壇者 株式会社風と土と 阿部裕志 / 一般社団法人越境イニシアチブ 原田未来
島田由香（ファシリテーター） / 柳川舞（パネラー） / 児浦良裕（パネラー）

海士町（島根県隠岐諸島）で地域づくりに取り組む阿部裕志氏は、トヨタ自動車のエンジニアから人口2,300人の離島へ移住した経験を基に、「風の人（よそ者）」と「土の人（地元民）」が織りなす「風土」の概念を提示した。海士町では「ないものはない（なくてもいい、大事なものはすべてある）」という哲学のもと、外部との交流を生存戦略として掲げている。阿部氏は、風と土は対立するのではなく、土があるから風が吹き、風が吹くから土が肥えるという補完関係にあると強調した。具体的な事業として、企業の幹部候補を島に派遣する研修「SHIMA-NAGASHI（島流し）」を紹介した。参加者は、都市の論理から離れ、素潜り漁や農作業といった身体的な実践を通じて「自分は何がしたいのか」という根源的な問い（センスメイキング）に向き合う。また、阿部氏は資本主義的な等価交換の限界を指摘し、贈与と返礼による「終わらない交換」こそが信頼（関係資本）を育むと説いた。金銭で完結させず、恩や負債を循環させることで、内と外の境界を超えた持続的な関係性が構築されるという視座を示した。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 1 Engawa dialogue ; Session① 「うち」と「そと」とえんがわ

登壇者 株式会社風と土と 阿部裕志 / 一般社団法人越境イニシアチブ 原田未来
島田由香（ファシリテーター） / 柳川舞（パネラー） / 児浦良裕（パネラー）

一般社団法人越境イニシアチブの原田未来氏は、大企業人材が一定期間ベンチャー企業で働く「レンタル移籍」の仕組みを通じ、「越境学習」の重要性を論じた。原田氏は、自身の転職経験から「隣の芝生は青いと思って飛び出したが、実は自分の芝生も青かった」と気づいた経緯を語り、完全に環境を変える転職ではなく、ホーム（自社）とアウェー（社外）を往復する「行ったり来たり」の運動こそが学びの本質であると定義した。

この越境プロセスにおいて、個人は「会社の看板」が通用しない環境で葛藤し、正解のない問いに対して意思決定する力を養う。これはVUCA時代に必要な「ネガティブ・ケイパビリティ（不確実性に耐える力）」の獲得につながる。また、原田氏は海士町の「見送り」文化に触れ、送り出す瞬間に「また来てね（おかえり）」というメッセージが含まれていることが、よそ者に「複数のホーム」を持つ感覚を与えると指摘した。組織や地域の流動性を高めるには、こうした「戻って来ることを前提とした越境」を許容する文化設計が不可欠であると結論づけた。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 1 Engawa dialogue ; Session① 「うち」と「そと」とえんがわ

登壇者 株式会社風と土と 阿部裕志 / 一般社団法人越境イニシアチブ 原田未来
島田由香（ファシリテーター） / 柳川舞（パネラー） / 児浦良裕（パネラー）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

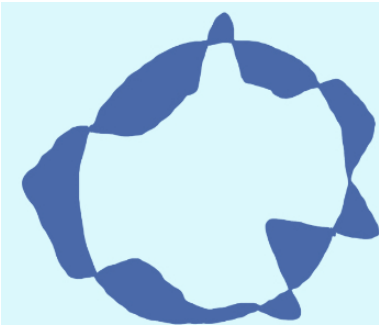
DAY 2 – 1 Engawa dialogue ; Session① 「うち」と「そと」とえんがわ

登壇者 株式会社風と土と 阿部裕志 / 一般社団法人越境イニシアチブ 原田未来
島田由香（ファシリテーター） / 柳川舞（パネラー） / 児浦良裕（パネラー）

後半の討議では、ファシリテーターの島田由香氏の実践を交え、内と外をつなぐ「縁側」の機能が議論された。島田氏は、ウェルビーイングを高めるPERMA理論の実践として「梅収穫研修」を紹介し、五感をフル活用する身体的体験が「フロー状態」を生み出し、創造性を高めるメカニズムを解説した。

議論の中で、言葉によるコミュニケーション（言語知）の手前に、歌や作業を通じた「身体的共鳴（身体知）」があることが確認された。阿部氏はフリーダイビングの経験から「深く潜るには脱力が必要であり、内側に深く潜ることで、より遠く

（外）へ浮上できる」という隠喩を提示した。これは、自己の内面（内）への沈潜こそが、他者や社会（外）への越境を可能にするという逆説的な真理を示している。最終的に「縁側」とは、物理的な場所にとどまらず、異なる背景を持つ他者と体験を共有し、共に未来の風景を眺める「第二者」的な関係性を築くための方法論であると総括された。



social
platform
academy

『うち』と『そと』と えんがわ...

SHIMA-NAGASHI.

海士町.

自立・挑戦・交流.

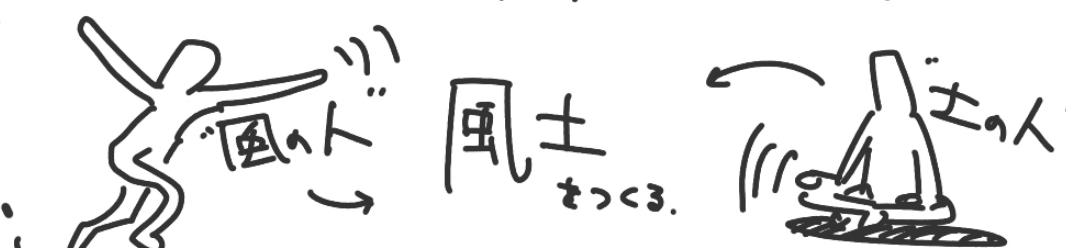
小ざと納税で起業支援.
移住者1000人!!

そんな島で
株式会社 風と土と

阿部裕志 a.k.a. ハズくん

ないものは
ない!!

心を動かすリーダーシップ.
→ 3日間200kmのビジネスを語る!!



島や地域の苦手がこもあえて!!

交流がてハルシオンからあんな!!

仲間とつくる現象は、自分の理想を越えて!!



始まりの問い.

『隣へ其は青いのか?』

越境の本質は

保つ<る>こと ホー4

ホー4とアウェイをつなぐこと.

新たな人材流動化の手段.



- 未知に飛び込む面白さ
- 「今ここ」の価値を知るよさ
- 果敢なものをつなげる興奮.



地域の越境を
どう生かすか.

原田未来 aka みずみ



ビジネス成長へのヤギ
(健康・長寿・パフォーマンス!!)

Well-being.

働き方

地域活性

真の人材育成

島田由香



- ① 真のコミュニケーション
- ② パーパスの認識
- ③ 体験ベースの学習

自律人材

越境学習

強み発揮×好奇心×想像力

創造性(イノベーション)



律は旋律の律 not 律指

身体知

海士町の『おかえり』
にみるえんがわ

身体はわがこころ
頭が言葉にする.



私の感覚を越えて
他者を感じる
其に感じる'共感'.

一次産業の中におく没入感・没入感.

自分の向きあう
重要性と
言葉にはなれない
感覚をつなげる
ための五感と
アート

自分の「うち」と「そと」まどうて来ます?
写真 P-T 旅行 出張のついで

本当に「うち」と「そと」をいっしょに?

風と土を混ぜるものは水. 流れをよむ

究極に自分を無くすと. 外とつながる...

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

境界と越境
(うち・そと・えんがわ)

風・土・水

Session1を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。(n=21)

身体性と内省

交流そのものの大切さ

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

今後、各地域での「えんがわ」をつくりたい。自分にとっての「えんがわ」は温泉だと気づいた

自分が今いる環境、街の「うち」「そと」「えんがわ」はどこになっているのか話し合ってみるのも必要だと思った

自分のウチと深くつながると、ソト（次なる道）が勝手にやってくる。その余白を整えるのがエンガワ。

境界と越境 （うち・そと・えんがわ）

うちとそとをつなぐえんがわ的なものは無数に存在している。

境目の引き方がアイデンティティを定義するものだと思っており、この線引きがそもそも問題の根源になっている場合は、境そのものを再考する必要があるのではないかと思います。

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

内容に関しては、水の人という話は興味深かったです。

風と土と水。まさに「水」の存在が大事だと思った。それがまさに「えんがわ」であるのかな。

風・土・水

内と外という壁ができるイメージだが、風と土というと共に風土を作っていく。

風と土と水の考え方がしっくり。それぞれを皆が関わっている。

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

感性や思考、その他たくさんあって、行き来の方は人それぞれだが、誰でもできて、誰でもなれると思った。

自分とつながる、ってことなんだ！

自分と向き合う時間や、越境する事での身体知の学習が絶対的に足りていない。自分の考えを言語化する機会もなければ、経営観を水に例えるような、経験や余裕が足りていない。・他者に気を遣うのに、自分や他社の内面への興味が少ないのか。

身体性と内省

直近、もっと「自分自身、自分の感覚を大事にせねば」と思い、自分の大好きな場所にいたりして「感覚」を取り戻そうとしていたところでした。そういった状況の中で「身体知」のことや、「自分と繋がって、初めて自分の問題と向き合える」ということなど、納得感があったし、より自分を大事にしていこうと思えた。

身体知 五感で感じる、内省し、言葉にし、インスピレーション 皮膚を拡張する(境界線の拡張)=共感 自分とつながる五感やアート

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

交流は手段でなく、目的でもよい。個人的にはパンチラインでした。

昨日からここまでの流れで、共振・共鳴が起きつつあることを実感した。

交流そのものの大切さ

交流は手段ではなく目的というのが、なるほどと思った。今後は積極的にいろんな人と交流しようとあらためて思った。

風土の成り立ちは、関心、関与、交流、共感を経て、共通項探しの連続、連続する対話と連続する恩渡しの相互作用でできあがるものなのかも・交流の良い入り口は共通項を探ること、それが深ければ深いほど交流が深くなるんだと思う

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

境界と越境
(うち・そと・えんがわ)

54.2%

風・土・水

37.5%

Session1を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。(n=21)

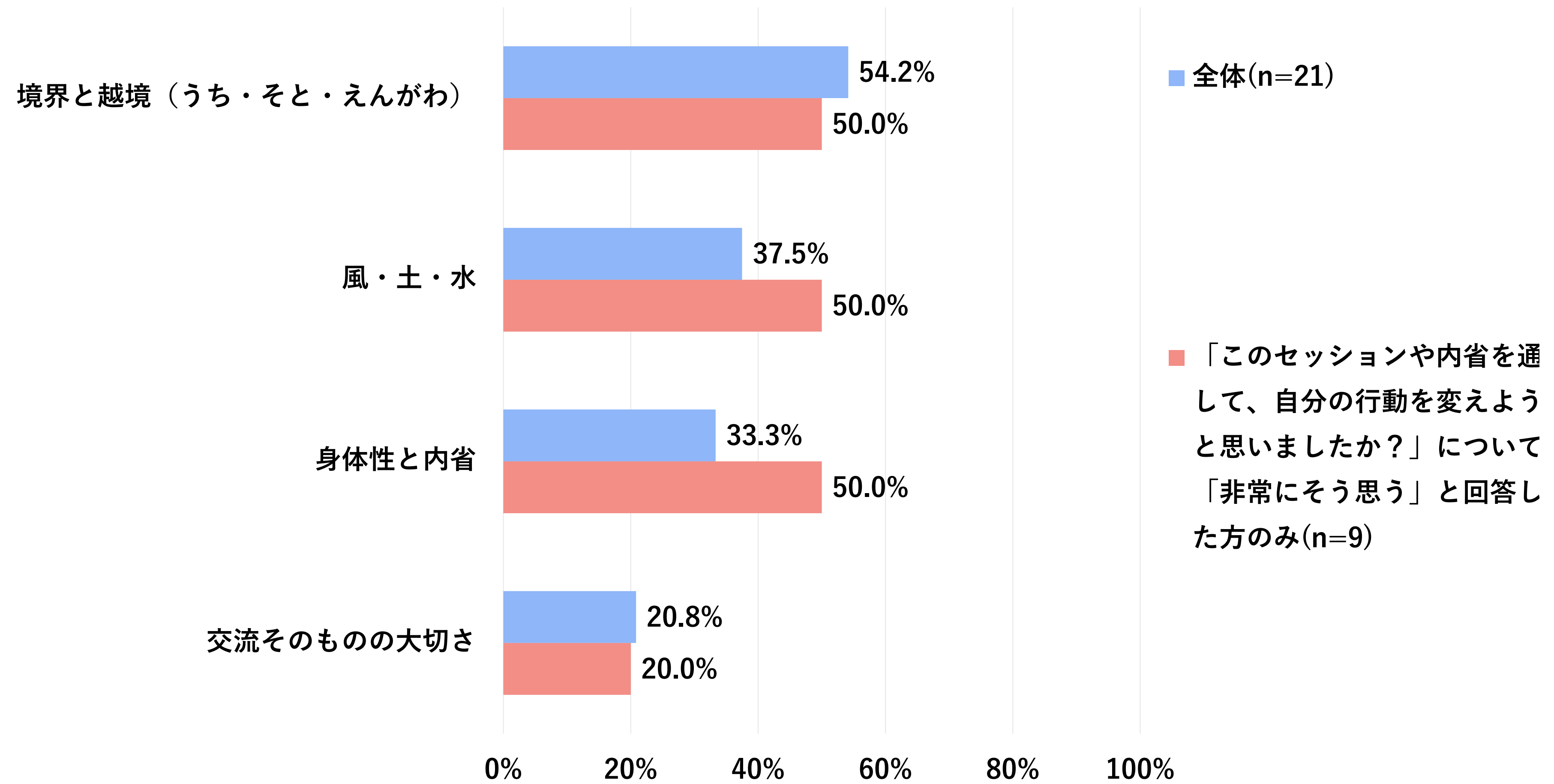
身体性と内省

33.3%

交流そのものの大切さ

20.8%

クオン株式会社による「参加者の内省」分析



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 2 Engawa dialogue ; Session② 「かん」と「みんな」とえんがわ

登壇者 NPO法人ムラツムギ 田中佑典 / 前橋デザインコミッション 宇留賀敬一
本田勝之助（ファシリテーター） / 海老原誠一（パネラー） / 村上敬亮（パネラー）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 2 Engawa dialogue ; Session② 「かん」と「みん」とえんがわ

登壇者 NPO法人ムラツムギ 田中佑典 / 前橋デザインコミッション 宇留賀敬一
本田勝之助（ファシリテーター） / 海老原誠一（パネラー） / 村上敬亮（パネラー）

総務省およびNPO法人ムラツムギの田中佑典氏は、人口減少が極限まで進行した地域における「撤退戦」のあり方を提起した。田中氏の実家がある奈良県大塔村は、1955年のピーク時から人口が激減し、現在は201人、14歳以下の子どもがゼロという「消滅」の危機に瀕している。田中氏は、こうした地域において無理な成長や存続を目指すのではなく、人口規模に見合った形へ軟着陸させる「村の終活」を提唱した。これは、死生学や緩和ケアの思想を地域づくりに応用し、消えゆく集落の苦痛（重荷）を分かち合う実践である。

具体的な手法として、田中氏は住民に対し「10年後の人口で今の活動を維持できるか」「何を守り、何を手放すか」を徹底的に問いかける対話を紹介した。このプロセスでは、祭りの存続などを巡り住民間で激しい葛藤や対立が生じるが、それを避けては通れない通過儀礼としている。また、維持困難となった銭湯やダムを「記憶」として記録に残すライフヒストリーの編纂事業を紹介し、物理的な場所が失われても、その意味を継承することで当事者の精神的ケアにつながると報告した。さらに、獣害（熊問題）への対処として、京都北部での事例を挙げ、守るべき農地と自然に還す領域の境界線（ゾーニング）を引き直す「戦略的縮小」の重要性を説いた。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 2 Engawa dialogue ; Session② 「かん」と「みん」とえんがわ

登壇者 NPO法人ムラツムギ 田中佑典 / 前橋デザインコミッション 宇留賀敬一
本田勝之助（ファシリテーター） / 海老原誠一（パネラー） / 村上敬亮（パネラー）

前群馬県副知事の宇留賀敬一氏は、2015年頃の地方創生交付金制度設計の経験から、従来の「補助金によるバラマキ」や「行政主導のまちづくり」の限界を指摘した。行政主導では持続可能な収益モデルが構築できず、民間活力を削ぐ結果になりがちであるとの反省から、群馬県副知事時代には徹底した「民間主導・行政支援」のモデル転換を断行した。

象徴的な事例として「群馬フラワーパーク」の再生が挙げられた。従来、県が年間1.7億円の指定管理費を負担していた赤字施設に対し、廃止も辞さない姿勢で見直しを行った結果、民間企業から「指定管理費ゼロ」での運営提案を引き出すことに成功した。これにより、20年間で約40億円の財政改善を実現しつつ、浮いた予算を前向きな設備投資（イノベーション）へと転換させた。

また、赤城山の活性化プロジェクトにおいては、「規制緩和」ではなく、あえて「規制強化」を行う逆転の発想を提示した。イエローストーン国立公園の事例を参考に、エリアを自然公園として厳格に指定し、無秩序な開発を抑制したのである。この「強い規制」が逆に環境価値を担保することとなり、スノーピークなどの優良企業の誘致や、長期的なブランド価値の向上に成功した。宇留賀氏は、行政の最大の武器は予算ではなく、こうした「規制権限」と「時間軸のデザイン」にあると結論づけた。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2-2 Engawa dialogue ; Session② 「かん」と「みん」とえんがわ

登壇者 NPO法人ムラツムギ 田中佑典 / 前橋デザインコミッション 宇留賀敬一
本田勝之助（ファシリテーター） / 海老原誠一（パネラー） / 村上敬亮（パネラー）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2 – 2 Engawa dialogue ; Session② 「かん」と「みん」とえんがわ

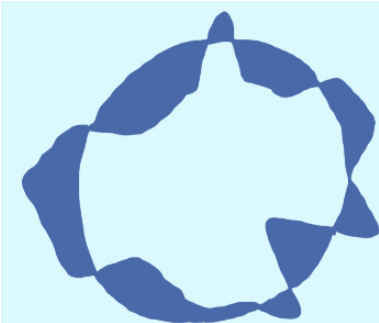
登壇者 NPO法人ムラツムギ 田中佑典 / 前橋デザインコミッション 宇留賀敬一
本田勝之助（ファシリテーター） / 海老原誠一（パネラー） / 村上敬亮（パネラー）

後半の討議では、会津若松市でのスマートシティ推進役である海老原氏、デジタル庁の村上氏を交え、官・民・地域が重なり合う領域（コモンズ）をいかに機能させるかが議論された。

田中氏は、群馬県での鉄道協議会の失敗事例を共有した。鉄道という公共財（コモンズ）を守る議論において、民間事業者は自社の利益や雇用維持を最優先し、地域住民は「行政が何とかするだろう」と当事者意識を持たず、三者の「シェアドインタレスト（共有利益）」を形成することの困難さが浮き彫りとなった。

これに対し村上氏は、合意形成の罫に陥らないための「七人の侍」戦略を提示した。最初から全員の合意を得ようとするのではなく、本気でコミットする少数の実践者（侍）を見つけ、彼らと共に小さな成功事例を作ること、後から周囲が追随する状況（ティッピングポイント）を作るべきだと主張した。

議論の総括として、ファシリテーターの本田氏は、新しい公共の場としての「縁側」の定義を行った。従来の会議のような、互いに向き合い交渉する「対面（第一者と第三者）」の関係ではなく、縁側に並んで座り、同じ庭（未来や風景）を眺める「横並び（第二者）」の関係性こそが必要であると提起された。互いの利害を調整するのではなく、官民地域が同じ方向を見つめる「縁側」のような場を設けることが、縮小社会における合意形成とコモンズ再生の鍵であるとの認識で一致した。



social
platform
academy

「かん」と「みん」とえんがわ

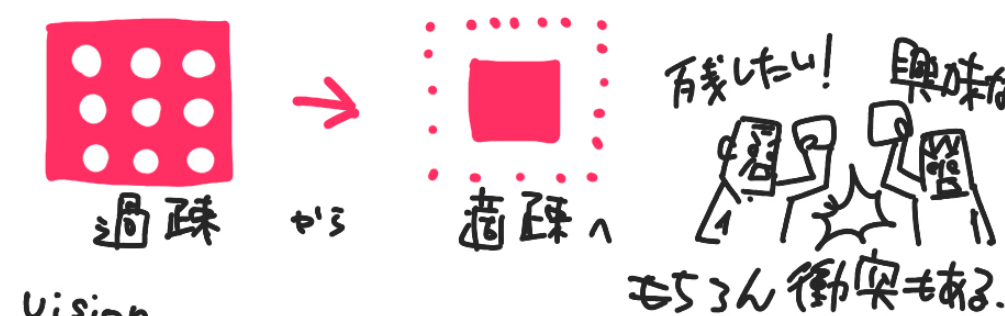
いかに上手く縮小していかけるか。

私の故郷
奈良県大塔村



なごりつある
村の記憶....

NPO法人ムラツギ
田中佑典氏

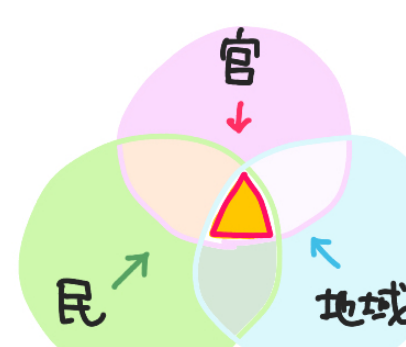


Vision

変化にもっと優しく

Mission
記憶を記録に
感情を回復す
足場をつくる

ここからの公共



地域創生の仕組みづくり

群馬県副知事 → 民主専のまちづくり (前橋デザインゼミナール)



フラワー・パワー
リニュー・アップ

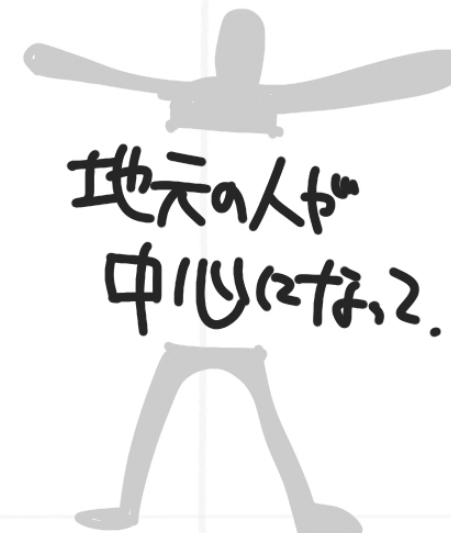
県立赤城公園
の活性化

民間企業のアイデアと
収益を寄付の仕組み

50年100年後に
どういふ景色を残したいか!

★限られた予算で最大の効果を追求

★規制手法による価値向上



地元の人を
中心にする。

早留賢敬氏



2011年の震災を経た...

福島にビジネスをつくる!!

データを使えるのではないか!?

安さで選ばれると、消費するだけ...

三方よしで事業をデザインする



総論合意だが各論は...

海老原 健一氏

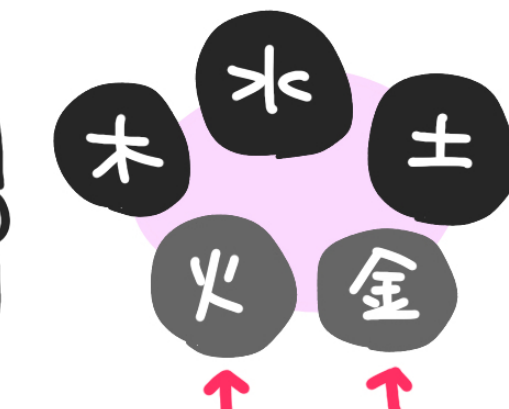
1. 日本、官は分配がうまくい

が選別と集中がへたくり...

2. 民はリードにお金を出すが...

地元の人たちのためのソフトがつかない

分配ではうまくいかないのに、民から
地域に陳列れようとした地域性は
ない!!



村上 敬亮氏

危機感とは火をつけやすい。
が本当にそれだけなのか...!?

①危機感 ②プレイフル ③地味コッ

考えられる人・考えられたい人

→ あなとサービスを止めようとする...!?

自己啓発は共助が生まれてきた。

フェアでフラットな 7人で動かし出す。

人数は多い。リーダーを複数お
様のセリワ-からあめふ



一緒に北極星をみる。
同業他社が100年に同じ舟に乗る。



変化に必要なものは...

- ①流動性
 - ・動けないうと終、211<
 - ・人は比較的動く
- ②外の人を入れる
 - ・自分と自分を言語化
できない。
 - ・言語化する他者とつなげる

クオン株式会社による「参加者の内省」分析

セクターを超える

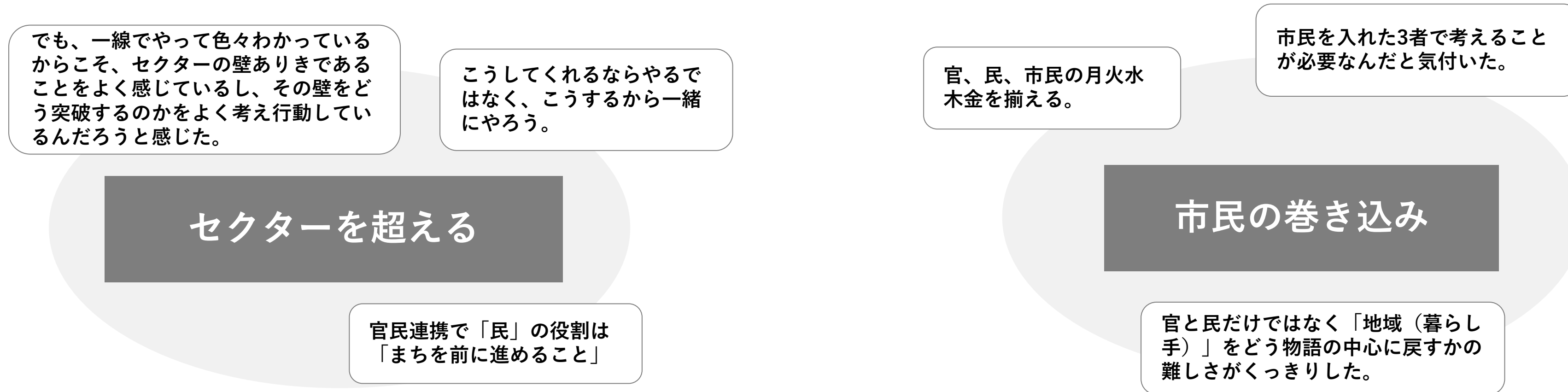
市民の巻き込み

Session2を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。（n=31）

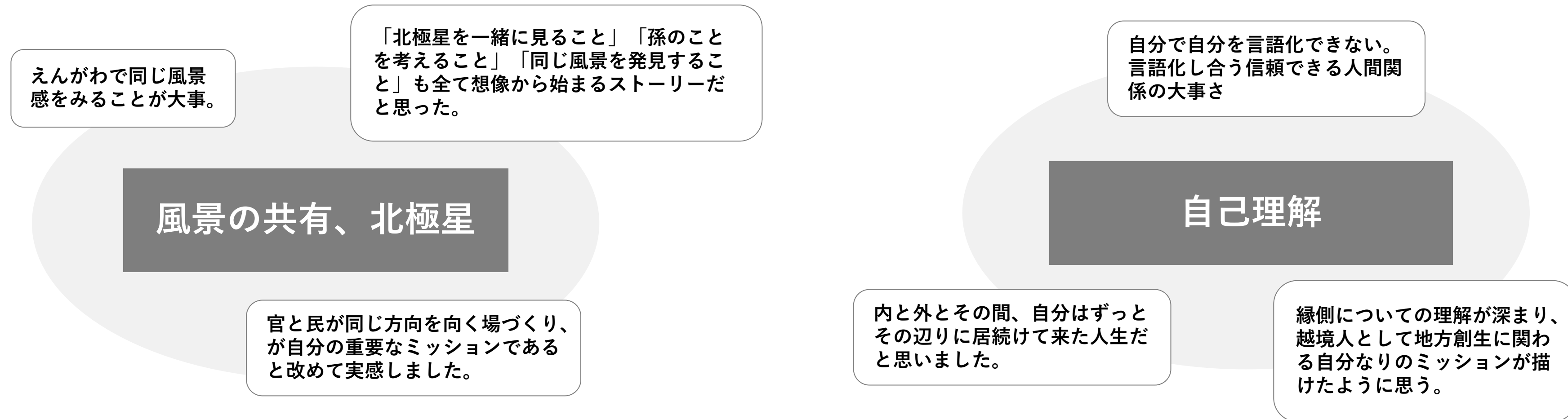
風景の共有、北極星

自己理解

クオン株式会社による「参加者の内省」分析



Session2を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。（n=31）



クオン株式会社による「参加者の内省」分析

セクターを超える

38.7%

市民の巻き込み

25.8 %

Session2を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。（n=31）

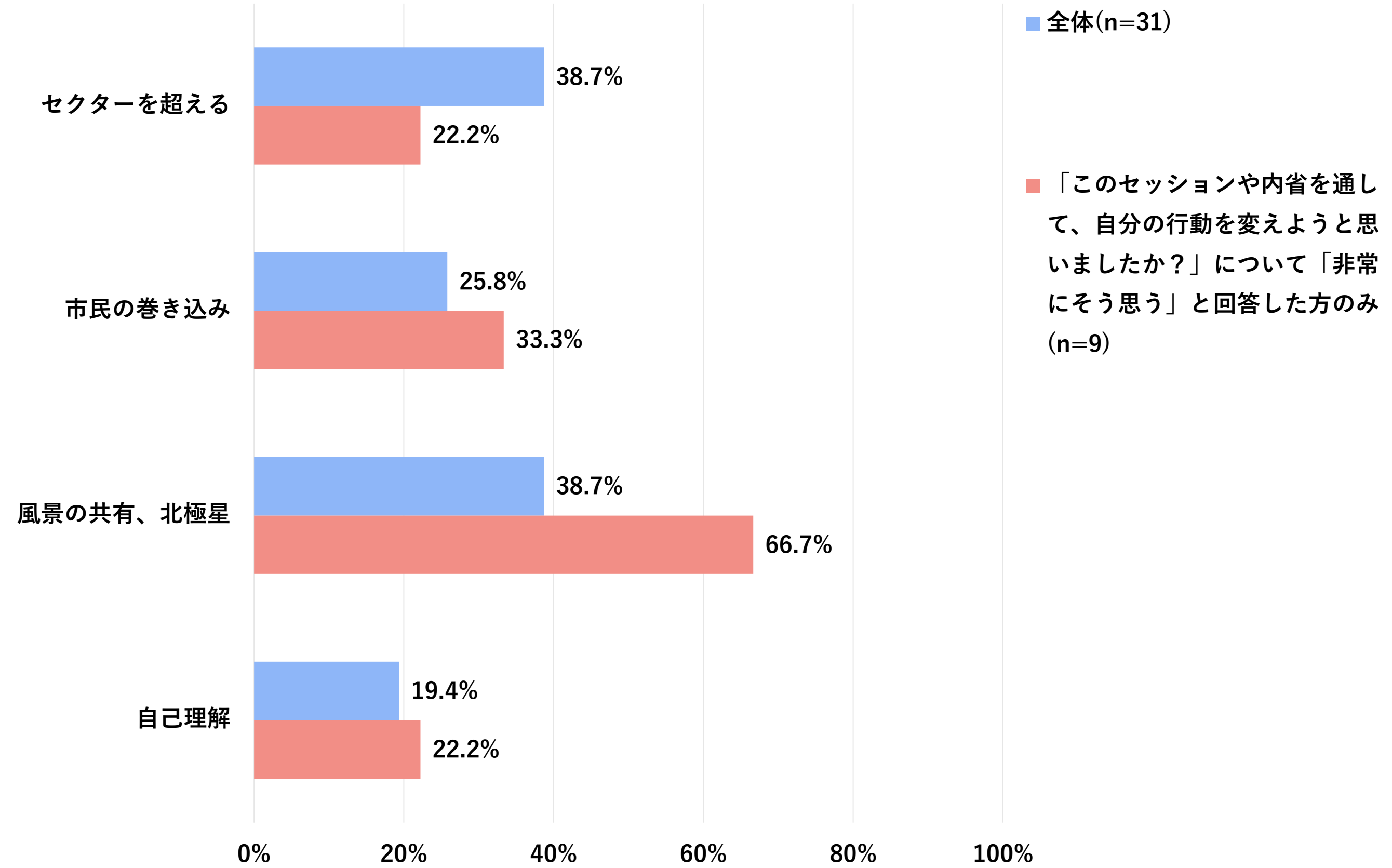
風景の共有、北極星

38.7%

自己理解

19.4 %

クオン株式会社による「参加者の内省」分析



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2-3 ダイアログセッション

登壇者 島田由香（ファシリテーター）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2-4 Engawa dialogue ; Session③ 「きおく」と「みらい」とえんがわ

登壇者 相馬行胤 / 株式会社QON 武田隆

谷川じゅんじ（ファシリテーター） / 國領二郎（パネラー） / 橋本薫（パネラー）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2－4 Engawa dialogue；Session③ 「きおく」と「みらい」とえんがわ

登壇者 相馬行胤 ／ 株式会社QON 武田隆

谷川じゅんじ（ファシリテーター） ／ 國領二郎（パネラー） ／ 橋本薫（パネラー）

相馬中村藩第34代当主の相馬行胤氏は、700年続く家系の歴史と2011年の原発事故という重層的な「記憶」を背負いながら、福島県浪江町への帰還と再生の実践を報告した。相馬氏は、自身と同じ「道胤」という名を持つ過去の当主が天明の飢饉という国難に直面した歴史的符合に触れ、災害を運命として受け入れつつ、先人の知恵を現代の技術で螺旋的に発展させる覚悟を示した。

現在取り組んでいる「ノーマの谷」プロジェクトでは、相馬野馬追に代表される伝統的文化（アナログ/熱量）と、NFTやDAOといったWeb3技術（デジタル）の融合を試みている。相馬氏は、現代における「侍」の役割について、かつてのような武力による支配者ではなく、「ヘルメットとスコップを持ち、いざという時に被災地を救う存在」とであると再定義した。

また、コミュニティ論においては、それをゴールとするのではなく、あくまで「きっかけ」と捉える視座を提示した。入り口としてのコミュニティを経て、参加者が「ファン」や「家族」のような濃い関係性へと深化していくプロセスこそが重要であり、過去の教訓を未来の繁栄へとつなぐための「縁側」的合議の必要性を訴えた。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2－4 Engawa dialogue；Session③ 「きおく」と「みらい」とえんがわ

登壇者 相馬行胤 ／ 株式会社QON 武田隆

谷川じゅんじ（ファシリテーター） ／ 國領二郎（パネラー） ／ 橋本薫（パネラー）

クオン株式会社の武田隆氏は、25年以上にわたるオンラインコミュニティ運営のデータと知見に基づき、SNSとコミュニティの構造的相違とその効用について解説した。SNSが「発信者と受信者」という非対称な一对多モデル（ブロードキャスト）であるのに対し、コミュニティは参加者同士が横につながる「車座」の関係性であると定義した。この構造内では心理的安全性が担保されやすく、実際にうつ症状のスコアが半減するといったピアサポート効果が実証されている。

運営の要諦として、武田氏は「目玉焼きモデル」を提唱した。これは、熱量の高いコアファン（黄身）だけでは閉鎖的な「たこつぼ化」を招くため、ライトな参加者層（白身）を意図的に共存させる設計思想である。また、ユーザーの定着には、物品提供などの外発的な「物的リワード」ではなく、他者からの承認や共感といった内発的な「心的リワード」が不可欠であると指摘した。

さらに、コミュニティの健全性を保つためには、声の大きなインフルエンサーではなく、静かに対話を促進するハブユーザーの存在が重要であり、現代ではAIによるファシリテーションやデータマイニングによる「関係性の見える化」がその質を担保する鍵になると論じた。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2-4 Engawa dialogue ; Session③ 「きおく」と「みらい」とえんがわ

登壇者 相馬行胤 / 株式会社QON 武田隆

谷川じゅんじ（ファシリテーター） / 國領二郎（パネラー） / 橋本薫（パネラー）



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2－4 Engawa dialogue；Session③ 「きおく」と「みらい」とえんがわ

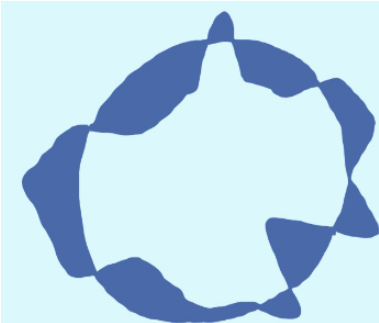
登壇者 相馬行胤 ／ 株式会社QON 武田隆

谷川じゅんじ（ファシリテーター）／ 國領二郎（パネラー） ／ 橋本薫（パネラー）

後半の討議では、スペースコンポーザーの谷川じゅんじ氏の実践と、慶應義塾大学名誉教授の國領二郎氏の理論を交え、コミュニティの質がいかに空間と経済を変容させるかが検討された。

谷川氏は、国立競技場でのアイドルグループ「Snow Man」の公演事例を紹介した。周辺住民による「騒音問題」の本質が、物理的な音量ではなく心理的な「関与度（自分事化）」の欠如にあると分析し、商店街のフラッグジャックや地元神社への奉納を通じて、地域住民を当事者として巻き込む空間演出（スペースコンポーズ）を展開した。その結果、地域全体が祝祭空間（リミナリティ）へと変容し、騒音が許容されるだけでなく、経済的な相乗効果（正の外部性）を生むことに成功した。

國領氏はこれを理論的に裏付け、デジタル技術によって経済活動や人間関係が可視化される「見える化する経済」の視点から解説した。特に、ネットワーク理論における「薄い関係（弱いつながり）」と「濃い関係」を対立させるのではなく、動的に共存させることがコミュニティのダイナミズムを生むと論じた。結論として、歴史の記憶と未来の技術、そして地域と来訪者が交差する「縁側」のような場を意図的に設計することこそが、未来を拓く鍵であるとの認識で一致した。



social
platform
academy

まおく & みらい & えんがわ

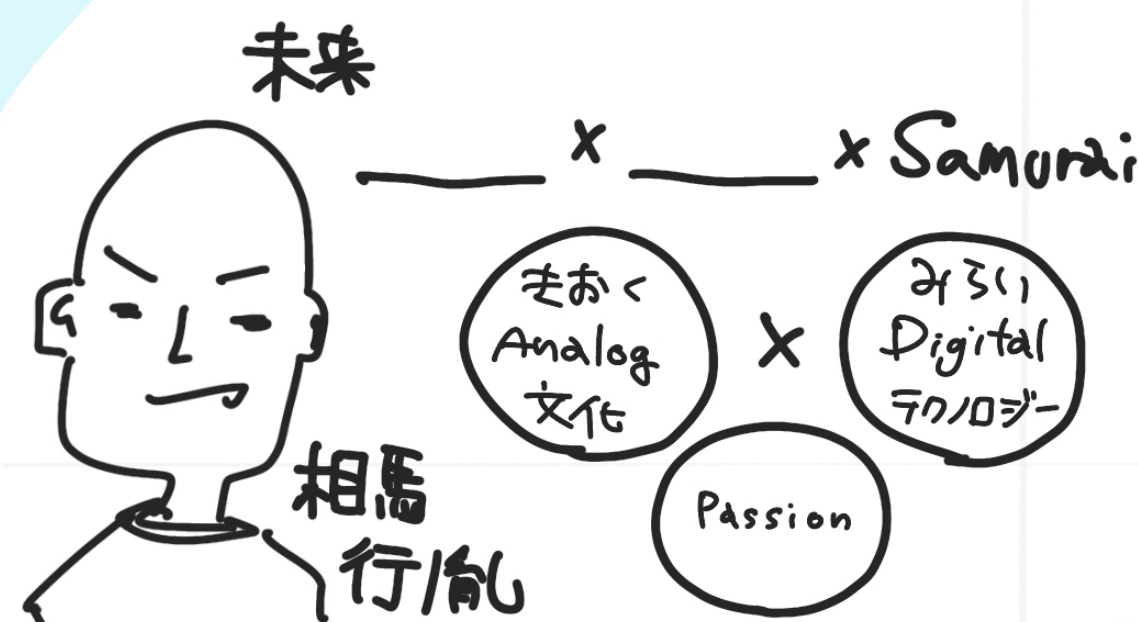
mission
1000年続いた歴史を
1000年 後に残す。

馬の谷 相馬千年馬隠物語

日本で唯一馬でしか行けないホテル

原宿事故も、我々にしかない財産

2023年3月に
13年ぶりの帰還が
認められた
浪江町。



甲冑師という職業
単位は「領」
500万から
5年まち

ホーム・ギャラリー
人は後3向きに
未来に
入っていく



うまくおける？
オンライン
コミュニティは
焚き火
のように



立場・空間・時間
的制約を解除

いつでも、どこでも
どこにいても

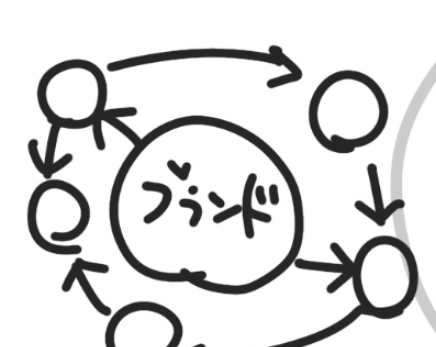
ともども...
コミュニティって？

多岐目的な
面がある。

コミュニティは 3つの種類

- 1階建て: 代装品などの
- 2階建て: ユーザ間の交流
- 3階建て: ユーザスタイル → 掛け合い → 協力

企業と消費者のつながり



インフル
エンサーは
実は派手じゃない

オンライン
グループインタビューは
7名が最適!!
9名だと少なくてEX

ファン化に影響を
与えたメッセージを
特定する。

マヨネーズのハビニューは
5.5日、用金で使われる。
"少め"と訴求

ファン育成の目玉焼きモデル

ライト層のファン化には
コアファンの声を見せ
て交流させる。
コアファンはコアコミュニティ

物質的リワードと精神的リワードの使い分け



AI化された
コミュニティ運営 クオン 武田隆

回遊がロイヤルティを
高める

コミュニティって
使いやすい言葉

ノイジーマイノリティ
サイレントマジョリティ

参加の拠り所
入札的なのか？



クオン株式会社による「参加者の内省」分析

コミュニティデザイン

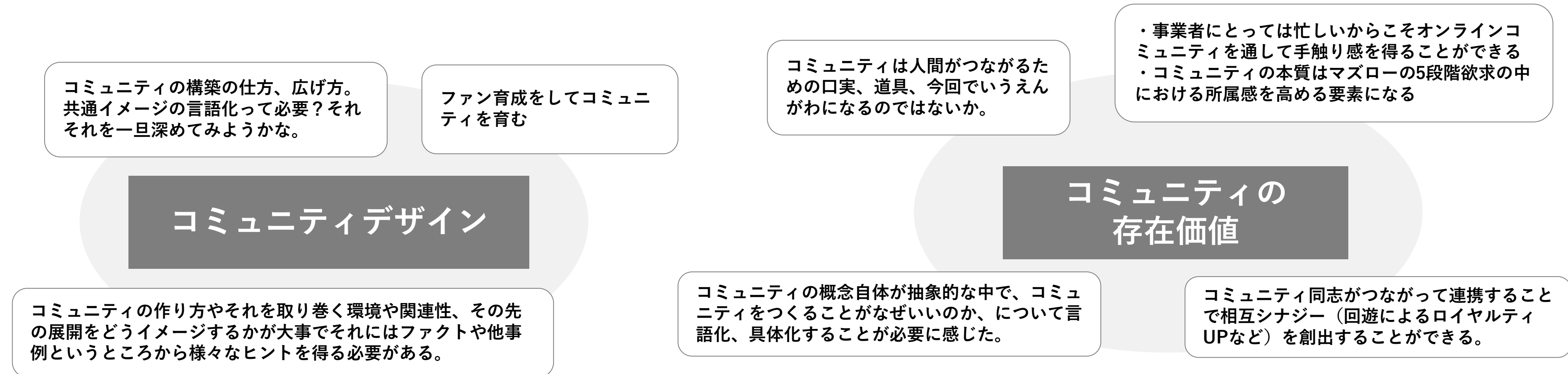
コミュニティの
存在価値

Session3を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。（n=26）

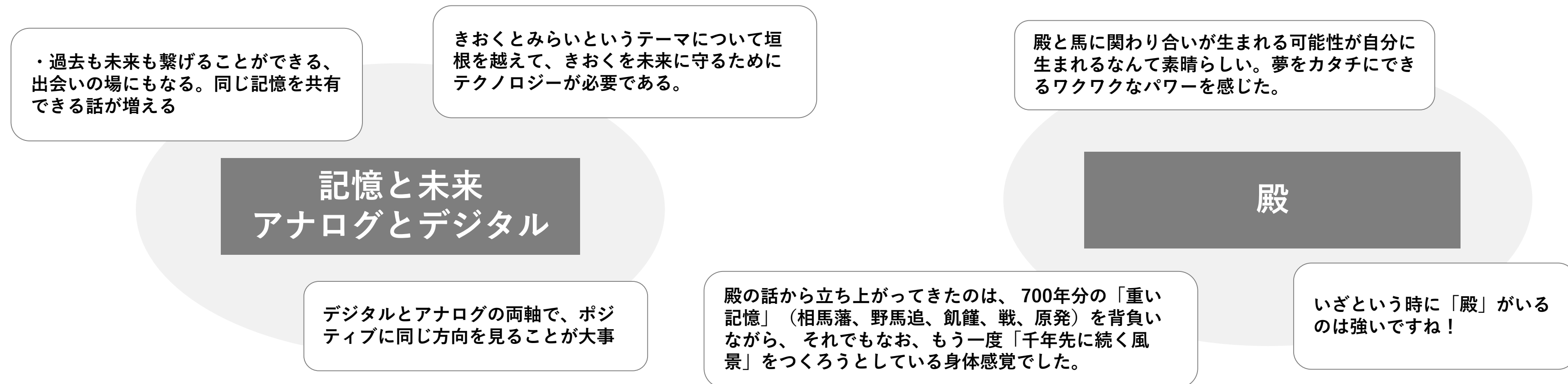
記憶と未来
アナログとデジタル

殿

クオン株式会社による「参加者の内省」分析



Session3を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。（n=26）



クオン株式会社による「参加者の内省」分析

コミュニティデザイン

33.3%

コミュニティの
存在価値

33.3%

Session3を通して、気づいたことや感じたことを自由にご記入ください。(n=26)

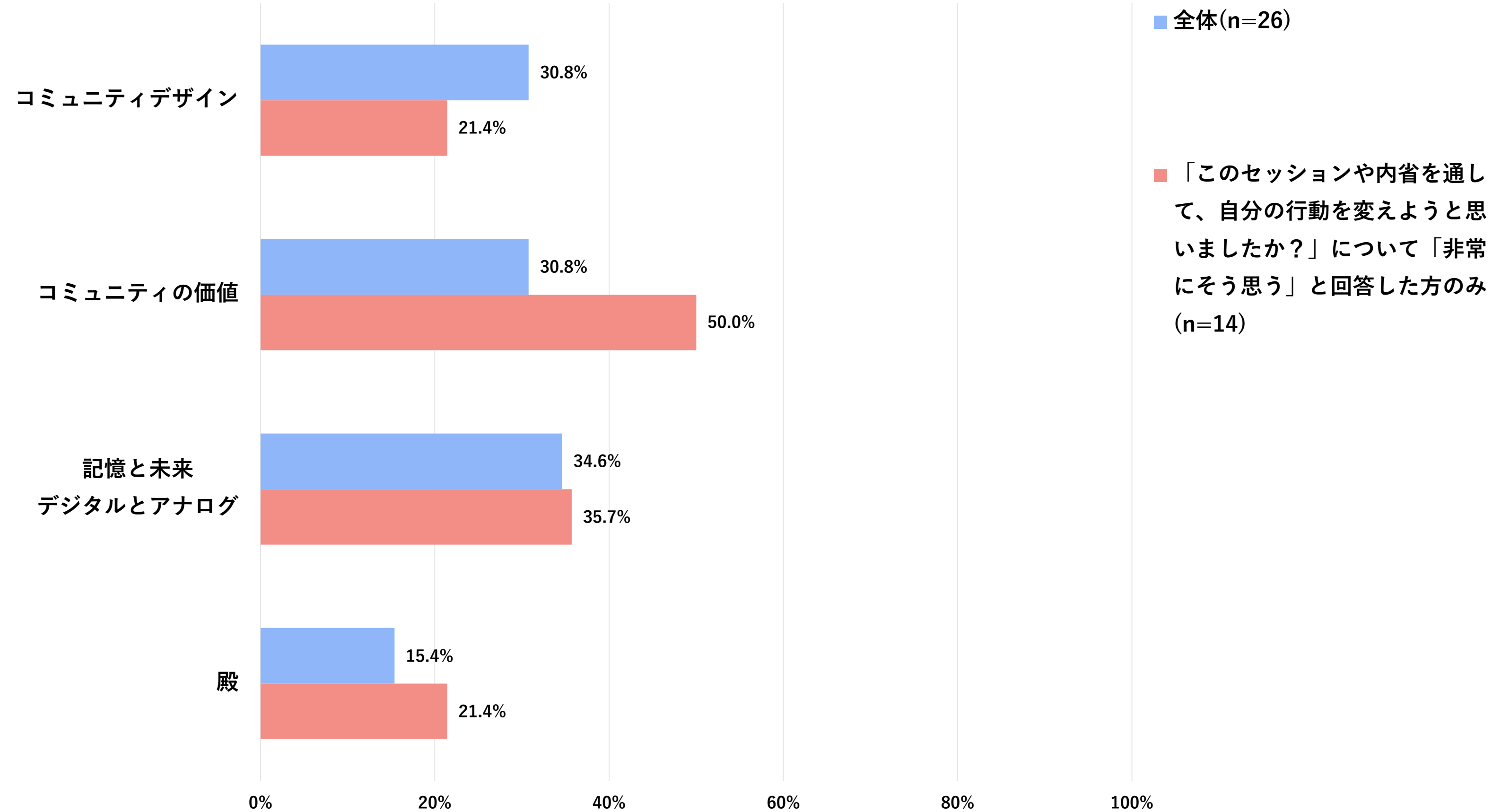
記憶と未来
アナログとデジタル

37.5%

殿

16.7%

クオン株式会社による「参加者の内省」分析



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 2-5 懇親会



DAY 3

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 3-1 クロージングセッション

登壇者 島田由香（ファシリテーター）



開心. 関係. 支援へ.

会場は HumanHub Tenneiji
世界へのワークスペース!!



いま壊れているのは
"関係の質"だ

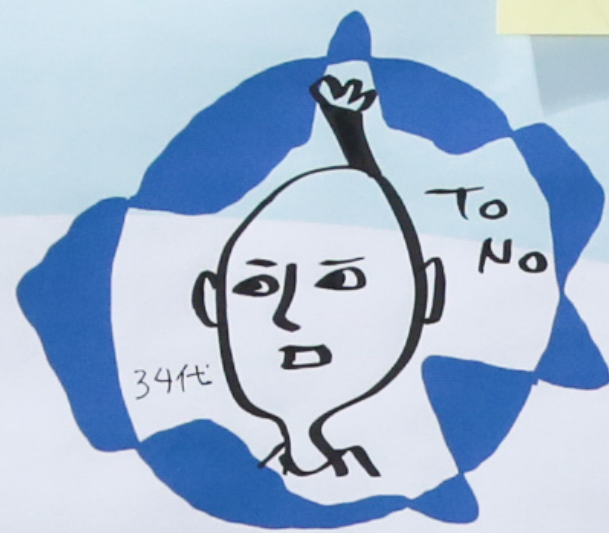
SPO Social
Platform
Organization + X

制度でも企業でもない
新しい公共の器

行政・市民・企業・研究者が
肩書きを外し、対話し共創する
「社会の縁側」

いくら
食べても
えんがわいて
F×CKin

超える!



ラフガキOK!
アサ

social
platform
academy

みんなでSPOを教え・学びあ

既存システムへの限界

行政

ルールが変えられ
追いつけない

企業

公益性低い

NPO

持続性低い

まちづくり=ボランティア
続けにくいのはもう難しい...

価値観の
転換

正解
と
問い

対等な
関係

参加

つながり方
を
考える社会。

Empathy → Question → Relationship → Prototype
共感 問い つながり 実験 構築
理念 × 実践知 → 編集知

共有知

LOVE

身体知は
どうなってるのか?

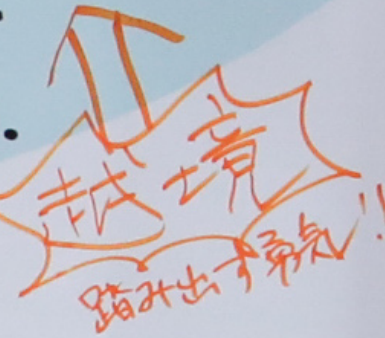
参加することが価値になる!!

関わることで未来を共創する。

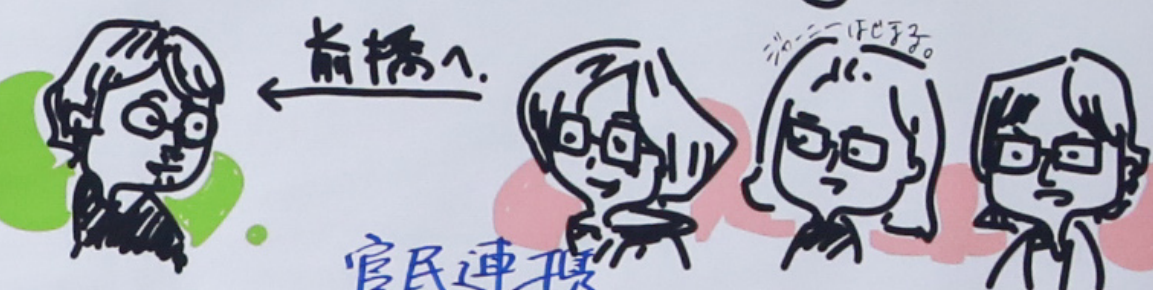
社会は、まだ編み直せる。

自分はまだ変えられる

「アサ」の「ア」の「ア」に
人は集まるんだ!!



一般社団法人 dialogue.



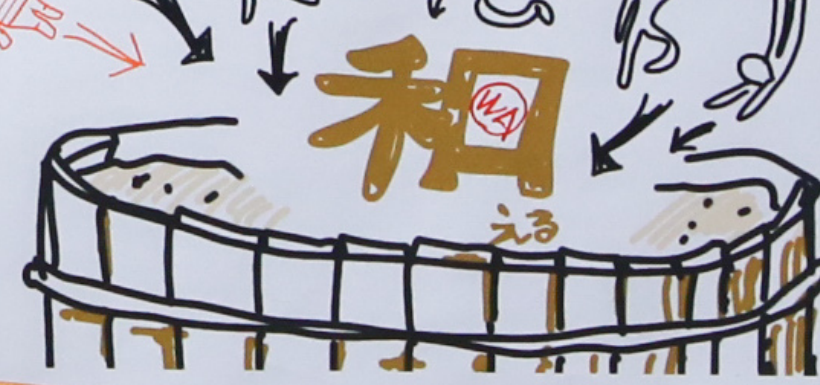
民間主導で
リスクを取った街づくり!!

ローカル・ゼブラ企業

地域課題の解決に持続可能な地域経済の構築

好奇心を持つこと・飛び込んでみること

縁側は始めから。放りにんで一晩たつと。いい味に。
来たらいい!!
このめがけ床は
宇宙!!



参加の喜びを感謝!



social
platform
academy

『うち』と『そと』と えんがわ...

SHIMA-NAGASHI.

海士町.

自立・挑戦・交流.

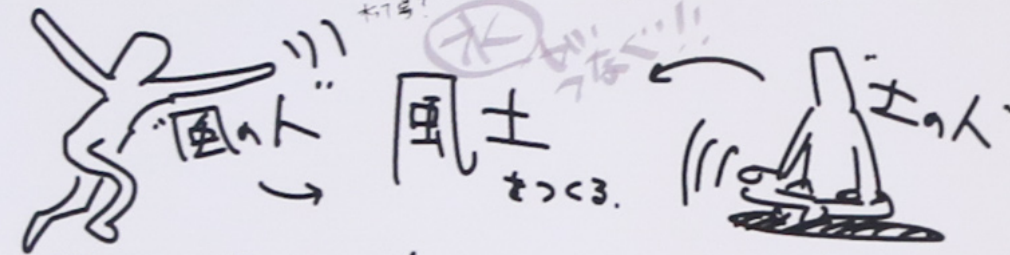
小ざと納税で起業支援.
移住者1000人!!

とんち島で
株式会社 風と土と

阿部 裕志 a.k.a. ハズくん

ないものは
ない!!

心を動かすリーダーシップ.
→ 3日間心からのビジネスを語る!!



島と地域が苦手なことある??

交流からハルシオンがらみ!!

仲間とくっつく現象は、自分の理解を越えて!!



特まりの問い.

『隣は青いのか?』

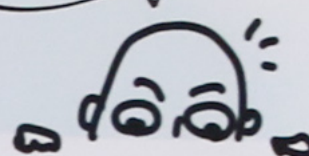
越境の本質は

『戻<る』と ホー4

ホー4とプライベートをつなぐこと.

新たな人材流動化の手段.

内着か!?



越境

プライベート

越境人材

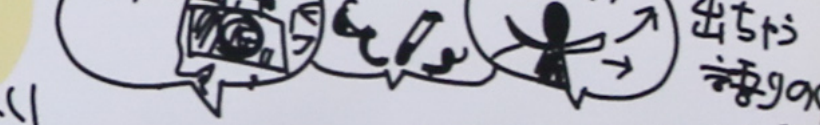
原田未来 a.k.a. Mitsu



一次産業の中にある没入感・没入感.

自分の「うち」と「そと」まどう行来する?

自分の「うち」と「そと」まどう行来する?



本当は「うち」と「そと」どっちの?!

風と土を混ぜるものは水。流れをよむ

息がナカとソトつながる?

五感が「エンカワ」

究極は自分を無くすと、外とつながる...

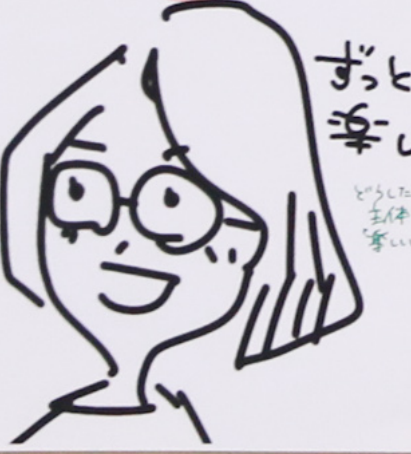
ビジネス成長のヤギ
健康・長寿・パフォーマンス!!

Well-being.

働き方 地域活性

真の人材育成

とは? 島田由香



人生長い時間の
10分間!

- ① 真のコミュニケーション
- ② パーパスの認識
- ③ 体験ベースの学習

自律人材
越境学習

強み発揮×好奇心×想像力

創造性(イノベーション)

五感で感じる!!

律は旋律の律

not 律指

身体知

海士町の「おかえり」
にみるえんがわ

身体はわがこと
頭が言葉にする



私の感覚を越えて
他者を感じる
共に感じる「共感」





social
platform
academy

「かん」と「みん」とえんがわ

いかに上手に縮小していかけるか。
住民はいなくても
町を縮小する場所
にできるか

私の故郷
奈良県大塔村



なごりつつある
村の記憶....

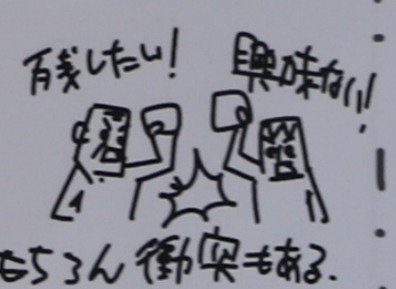
NPO法人ムラツキ
田中佑典氏



過疎



過疎



Vision

変化にもっと優しく

Mission

記憶を記録に
感情を表現

足場をつくる

こけらけの公共

コモンス



地域創生の仕組みづくり

群馬県副知事 → 民主主義のまちづくり (前橋デザインセンター)



フラワーパーク
リニューアル

県立赤城公園
の活性化

民間企業のアパレル
収益を寄付の仕組み

50年100年後に
どういふ果実を残したいか!

★限られた予算で「最大の効果」を追求

★規制手法による価値向上

地元の人々
中心になる?

地銀を増やすの??

地元の人々
中心になる?

宇留賀敬一



2011年の震災を経た...

福島にビジネスをつくる!!

データを使えるのではない!!

安さで選ばれると、消費するだけ...

三方よしで事業をデザインする



総論合意だが各論は...

海老原城一氏

1. 日本は官が分配がうまくない

セレクトと集中がハタクリ...

2. 民はリードにお金を出すが...

地元の人々のためのリフトがつかない

分配ではうまくいかないのて民から

地域に陳列してうまくいけば地域性は

ない!!



村上敬亮氏

危機感とは火をつけやすい。

が本当にそれだけなのかな...!?

①危機感 ②プレイフル ③地味コジ

考えられる人・考えられたい人

→ あえてサービスを止めると...!?

自覚型では其助が生まれてきた。

フェアでフラットな7人で動く。

偶数は集める。リーダーを排除する
様子をセリタ-からあつめる

侍

変化に必要なものは...

①流動性

②外の人を入れる

郵政が止ると、早く
人は比較的動く

自分と自分と言語化
できない。

言語化するとは他者と対峙する

言語化された世界と
自分の世界?



まおく & みらい & えんがし

日本で唯一馬でしか行けないホテル

馬の谷 相馬千年馬隠物語

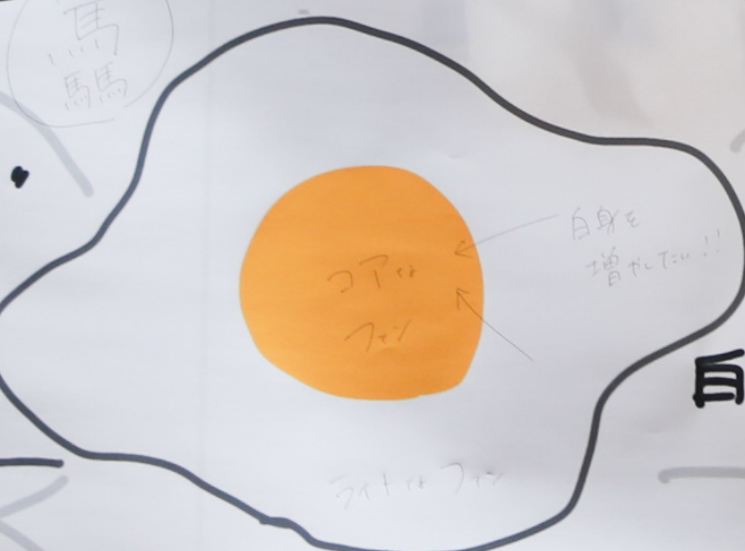
原路事故も我々にしかない財産

mission
1000年続いた歴史を
1000年 後に残す。

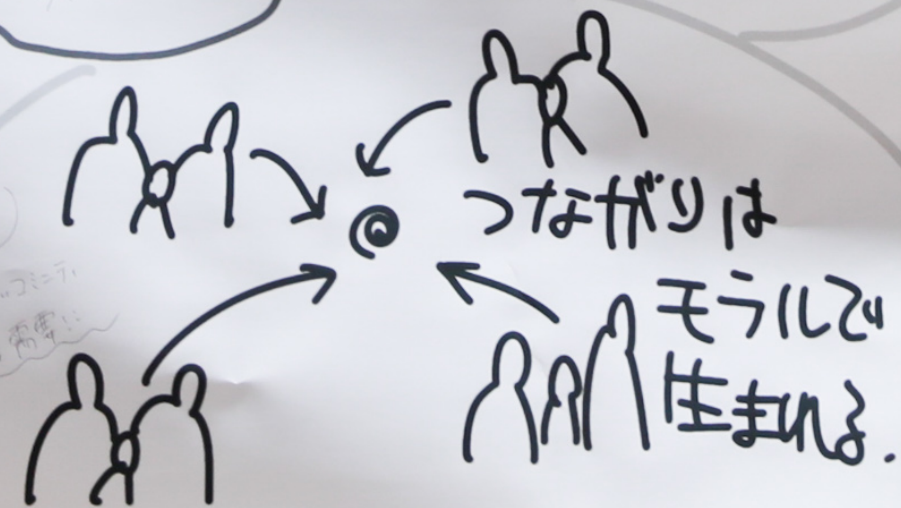


甲冑師という職業
単位は領
500万から
5年まち

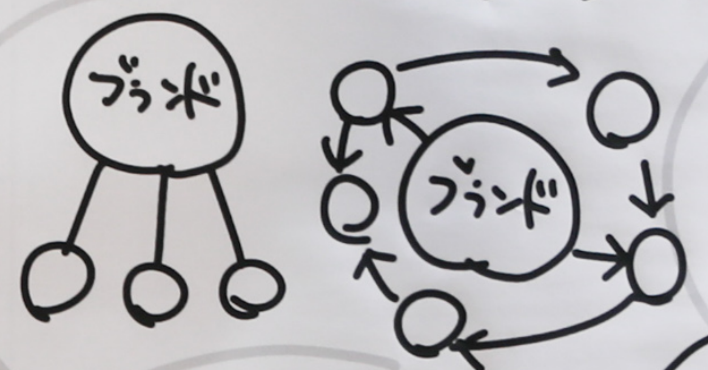
ホーリィ・ギャラリー
人は後向きに
未来に
入っていく



このSPAは
着身のあまり
自身をどうあかぬけ!



企業と消費者のつながり



インフル
エンサーは
実は派手じゃない

オンライン
グループインタビューは
7割が最適!!
9割までが最適!!

立場・空間・時間
的制約を解除

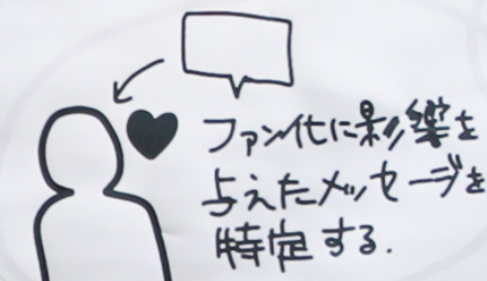
いつでも、どこでも
どこにいても

コミュニティって?

目的
面がある。

コミュニティは3つの種類

- 1階建て: 代装品の集合
- 2階建て: ヨーグルトのグループ
- 3階建て: ライフスタイル → 掛け合い → 協力生命

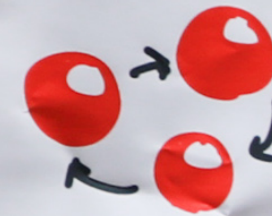


ファン育成の目玉焼きモデル

ライト層のファンには
コアファンの声を見せ
たまにする
コアファンのみでは多岐にわたる

物理的リワードと1日のリワードの使い分け

AI化された
コミュニティ運営



回遊がロイヤルティを
高める

コミュニティ
使いやすい言葉

ノイズマインリティ
サイレントマジョリティ

参加の場所
入札的なのか?

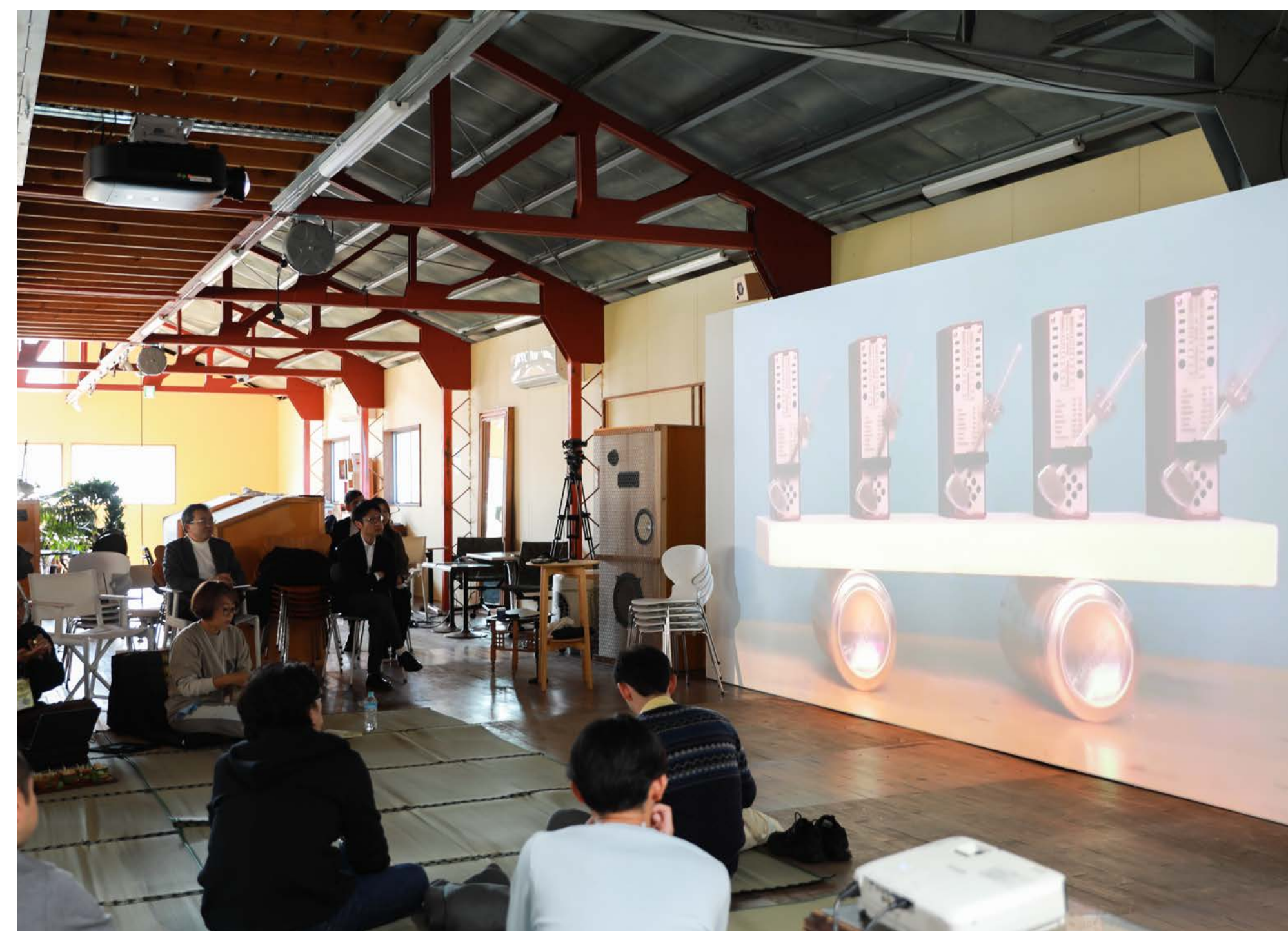
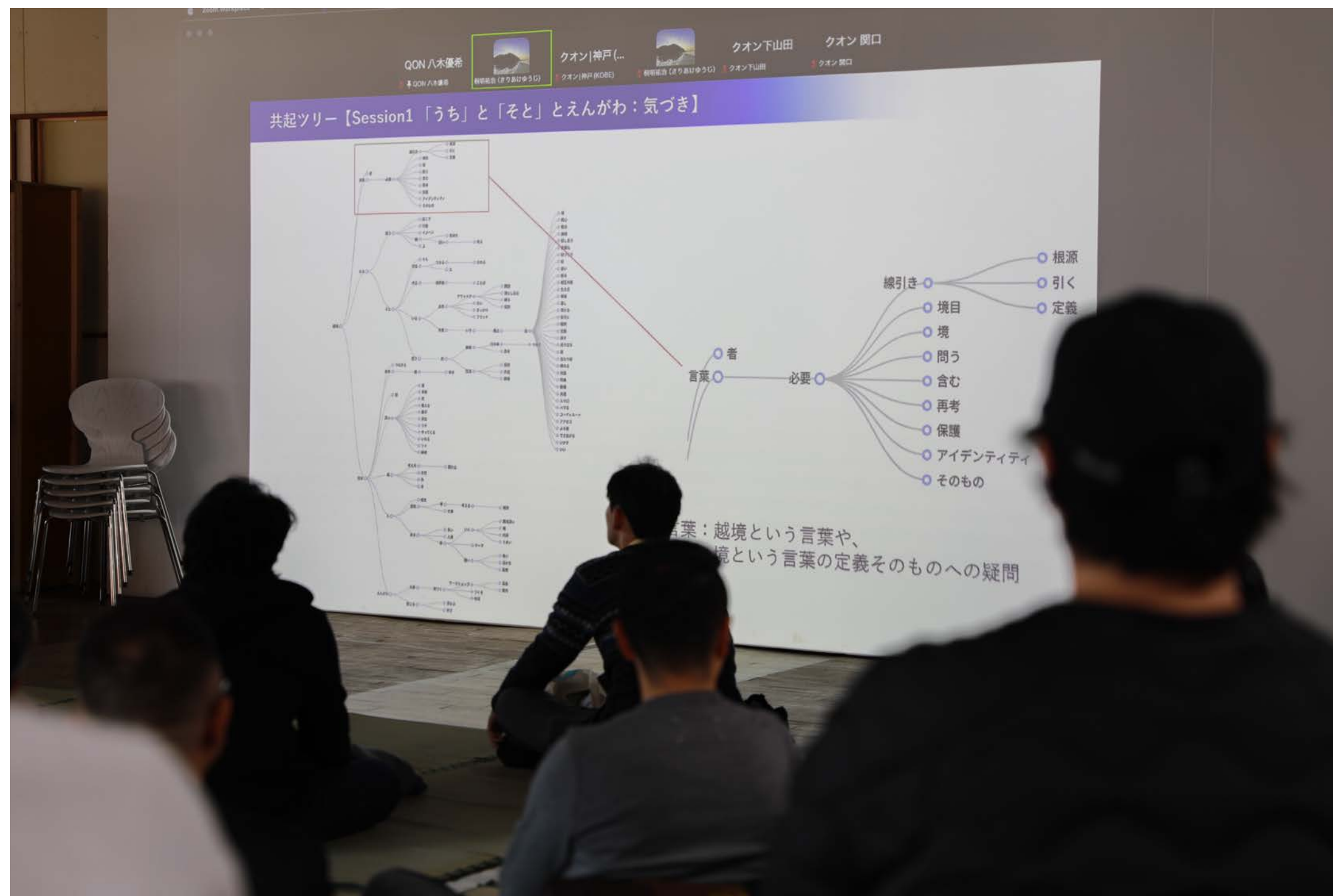
マヨネーズのハビユーは
5.目へ用途はわかる。
"少め"と書き

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 3-2 種まきセッション

登壇者 谷川じゅんじ（ファシリテーター） ／ 株式会社クオン 八木優希



Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 3-2 種まきセッション

登壇者 谷川じゅんじ（ファシリテーター） ／ 株式会社クオン 八木優希

一般社団法人dialogueの谷川じゅんじ氏は、データ分析の結果を受け、これからの社会変革のフレームワークと心構えについて総括を行った。

- CSV × SPOによる社会OSの更新： 谷川氏は、企業が事業を通じて社会価値を生む「CSV（Creating Shared Value）」と、人と人の関係性から社会基盤を立ち上げる「SPO（Social Platform Organization）」の掛け合わせを提唱した。企業の持つリソース（資金・規模）と、コミュニティの持つ関係性（信頼・熱量）を融合させることで、既存の機能を維持したまま社会のシステムをバージョンアップする「社会のOSのアップデート」が可能になると論じた。
- 「ぬか床」としてのプラットフォーム： 前橋市での実践（MAEP）を例に、地域づくりを「ぬか床」に例えた。多様な微生物（市民・企業・行政）が混ざり合い、時間をかけて発酵することで旨味（価値）が出るように、議論や活動が熟成される「場」を設計する必要性を説いた。
- 山登りから「波乗り」へ： 不確実なVUCA時代における戦略として、ルートを決めて頂上を目指す「山登り」型から、環境の変化（波）を読み、周囲と調和しながらその力に乗る「波乗り（ライディング）」型への転換を提示した。

Social Platform Academy in AIZU

— 共鳴からはじまる、社会を耕す共育の場 —

DAY 3-2 種まきセッション

登壇者 谷川じゅんじ（ファシリテーター） ／ 株式会社クオン 八木優希

後半の討議では、スペースコンポーザーの谷川じゅんじ氏の実践と、慶應義塾大学名誉教授の國領二郎氏の理論を交え、コミュニティの質がいかに空間と経済を変容させるかが検討された。

谷川氏は、国立競技場でのアイドルグループ「Snow Man」の公演事例を紹介した。周辺住民による「騒音問題」の本質が、物理的な音量ではなく心理的な「関与度（自分事化）」の欠如にあると分析し、商店街のフラッグジャックや地元神社への奉納を通じて、地域住民を当事者として巻き込む空間演出（スペースコンポーズ）を展開した。その結果、地域全体が祝祭空間（リミナリティ）へと変容し、騒音が許容されるだけでなく、経済的な相乗効果（正の外部性）を生むことに成功した。

國領氏はこれを理論的に裏付け、デジタル技術によって経済活動や人間関係が可視化される「見える化する経済」の視点から解説した。特に、ネットワーク理論における「薄い関係（弱いつながり）」と「濃い関係」を対立させるのではなく、動的に共存させることがコミュニティのダイナミズムを生むと論じた。結論として、歴史の記憶と未来の技術、そして地域と来訪者が交差する「縁側」のような場を意図的に設計することこそが、未来を拓く鍵であるとの認識で一致した。



An architectural rendering of the Union Arena Kobe, a large, modern sports and entertainment venue. The arena features a distinctive, curved, ribbed roof structure. In the foreground, a wide, paved public plaza is populated with numerous people engaged in various activities, including walking, sitting on benches, and playing. The plaza is bordered by a low wall on the right side, which overlooks a body of water. The overall scene is set during the day, with a clear sky and some clouds visible in the background.

- Next -

Social Platform Academy in KOBE

2026 autumn

Appendix



**social
platform
academy**

JTQ Inc.

2025年11月19日

FRAME

Award

Coworking Space of the Year 2024

CO-WORKING SPACE • SHORTLISTED - CO-WORKING SPACE OF THE YEAR

FRAMEの「コワーキングスペース オブ ザ イヤー 2024」を受賞。地域の廃材を用いた製品作り等、地域と連携した取り組み、そして伝統工芸の振興と持続可能な地域社会の発展への貢献が評価されました。

<https://frameweb.com/project/human-hub-tenneiji-soko>

FRAME

INSIGHTS

SPACES

PRODUCTS

AWARDS SUBMISSIONS

AWARDS ▼

MAGAZINE

BOOKS

EVENTS

LOGIN

SUBSCRIBE



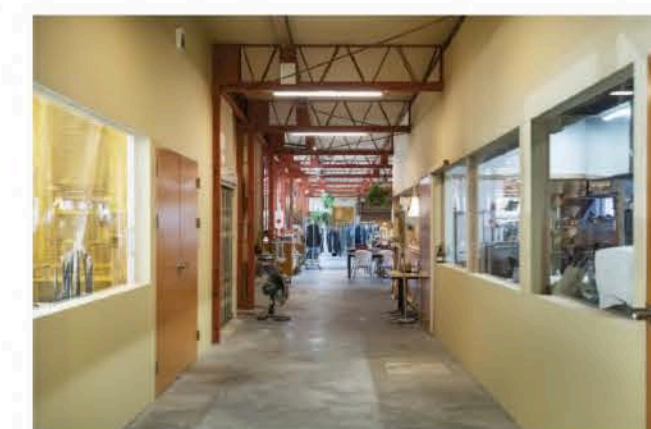
HUMAN HUB TENNEIJI SOKO SCHEMATA ARCHITECTS

06 AUG 2024 • CO-WORKING SPACE • SHORTLISTED - CO-WORKING SPACE OF THE YEAR

SAVE SUBMISSION

Silver

Gold



© Junji Tanigawa & JTQ 2023



UCLA Department of Physics & Astronomy 「Spontaneous Synchronization」

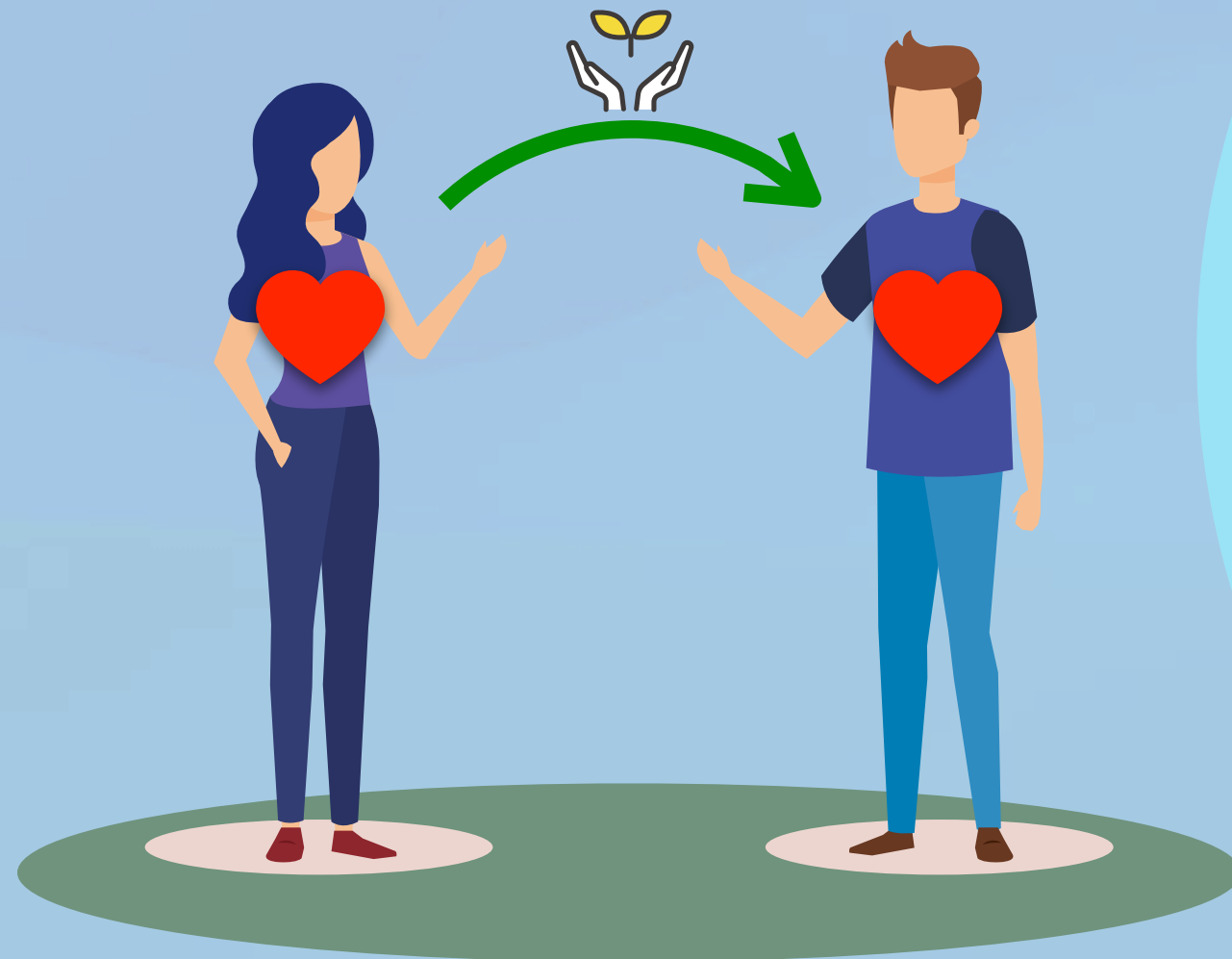
<https://demoweb.physics.ucla.edu/content/160-spontaneous-synchronization>



Whats CSV?

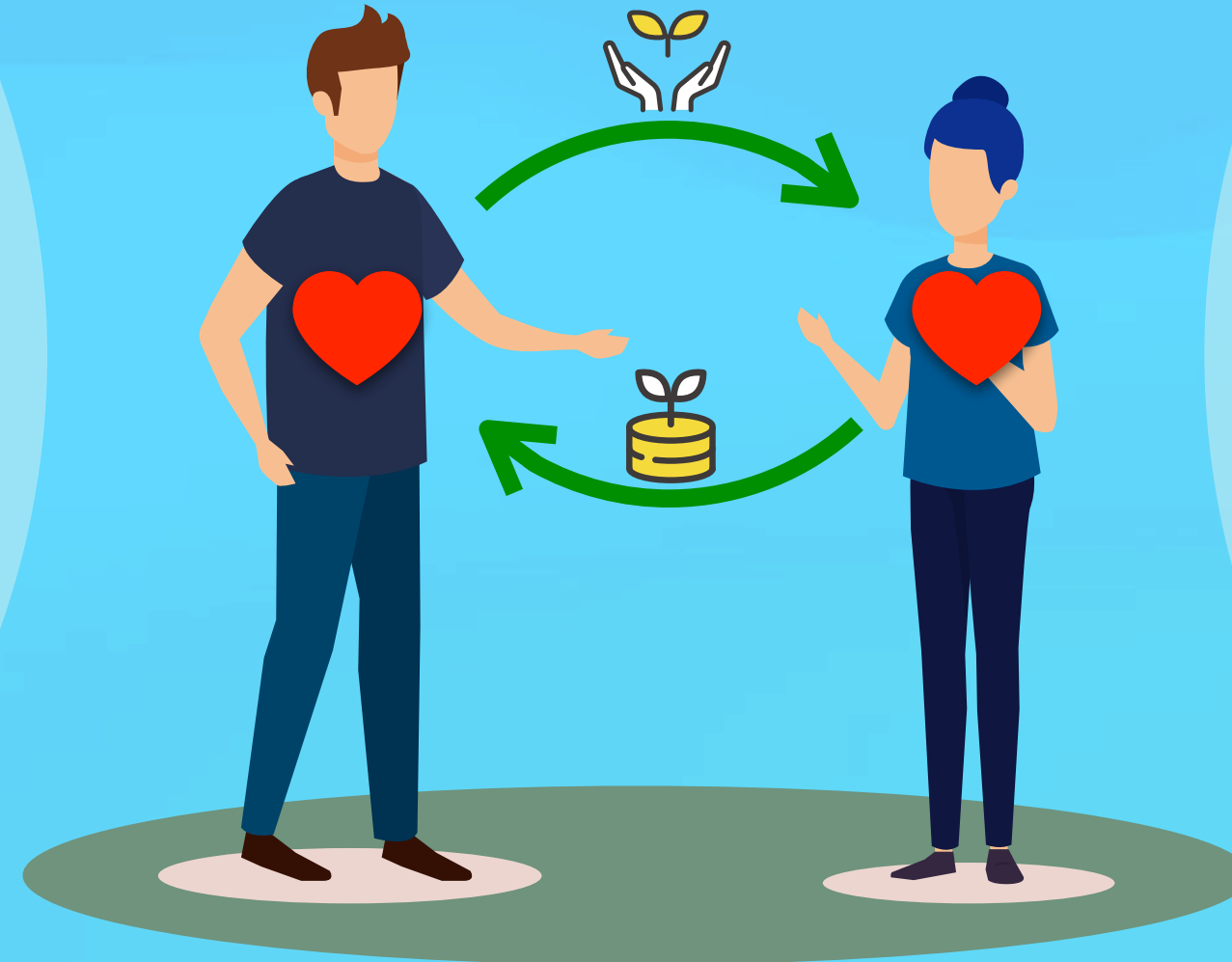
ボランティア

目 的：困っている人や環境を助けることがメインで、報酬はもらわない。
事 例：地域の清掃活動に参加したり、募金を集めたりすること。
活 動：個人や団体が自主的に行う。短期的な場合も多い。
ゴール：社会に貢献することが目的で、利益を追求しない。



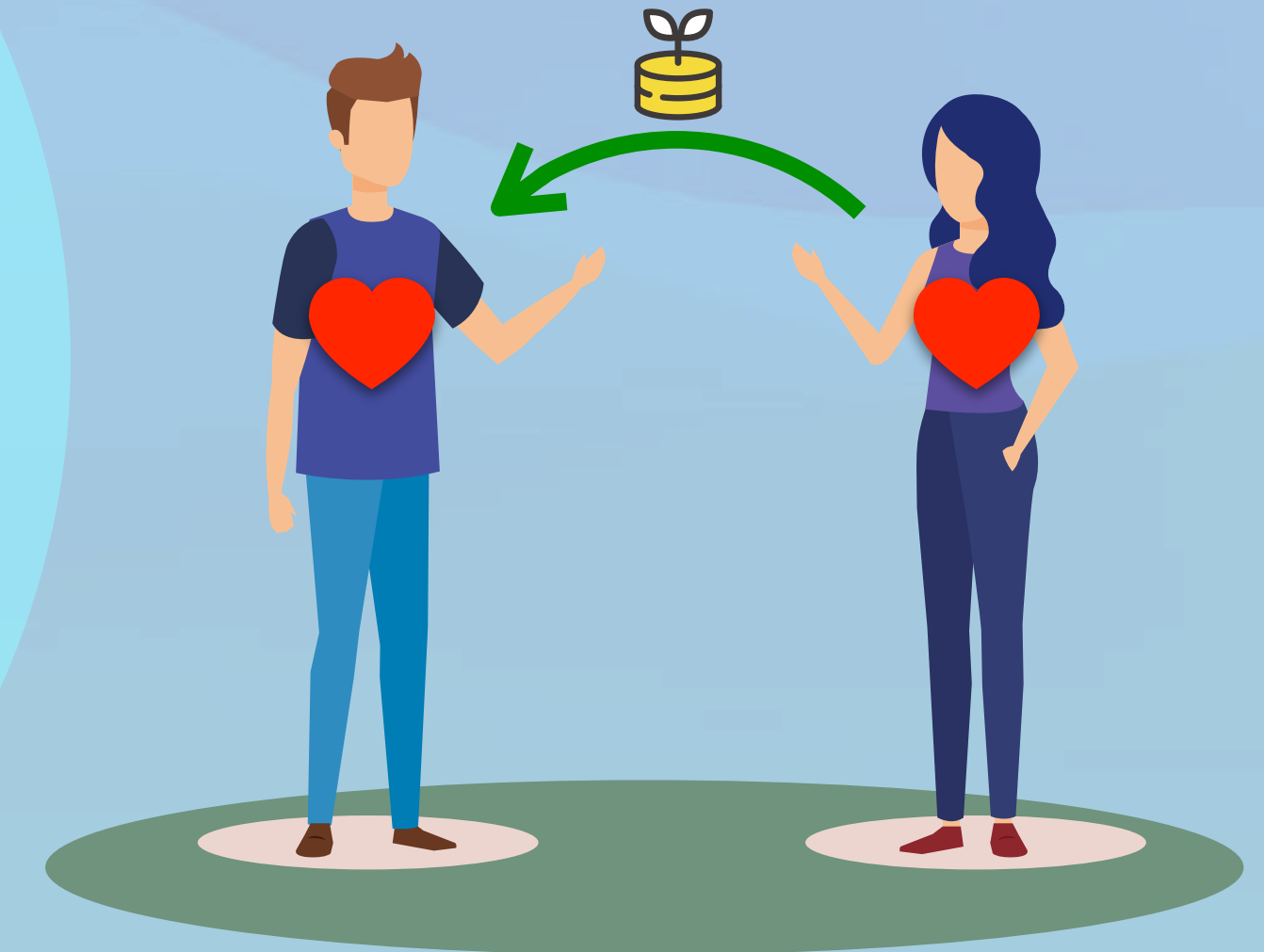
CSV（共有価値の創造）

目 的：会社の利益を上げながら、社会の問題も解決すること。
事 例：環境に優しい製品を作ること、売り上げを伸ばしつつ、地球の環境も守る。
活 動：ビジネスの一部として、長期的に続けられる。
ゴール：会社の利益と社会への貢献を同時に達成すること。



CSR（企業の社会的責任）

目 的：企業が社会や環境に対して責任を持ち、持続可能な発展に貢献すること。
事 例：大手企業が再生可能エネルギーを導入し、環境負荷を削減する。
活 動：ボランティア活動の奨励や地域社会への寄付を行う。
ゴール：企業の信頼性向上と社会全体の福祉向上を実現すること。



	ボランティア	CSV	CSR
目 的	社会貢献がメイン	企業の利益と社会的価値の同時創出	社会や環境に貢献
活 動	個人・団体の自主活動	事業を通じた社会課題の解決	環境保護、地域支援、従業員福利の向上
報 酬	基本的に無報酬	経済的利益と社会的評価	ブランドイメージ向上、顧客信頼獲得
期 間	短期の活動が多い	長期的に続けやすい	行政機関と連携

SPO × CSV

社会OSと企業OSの統合

問題の本質

壊れているのは“関係の質”

分断・孤立・断絶。

単独では解けない課題が増えている。

CSVとは何か

CSV = 社会価値 × 企業価値 を同時に生む経営OS

企業が社会課題を事業で解くための
“価値創造モデル”

SPOとは何か

SPO＝関係性を耕す社会OS

対話・共感・共創・知の循環により
社会の「縁側」をつくる構造。

原理の違い

CSV＝価値を生むOS

SPO＝関係を生むOS

レイヤーが違うからこそ、補完し合う。

二つの役割分担

SPO

関係性を耕す

対話

共感

信頼

文脈

住民
参加

CSV

価値を生む

事業化

投資

スケール

収益
還元

産業
づくり

相互補完モデル

SPOが“関係の土壌”をつくり
CSVが“経済の果実”を育てる

この二輪が揃ってはじめて持続性が生まれる。

まえばしENGAWAプラットフォーム

MAEPの立ち位置：制度・市民・現場をつなぐ中間支点

MAEP = 自律自走の中核プラットフォーム

民間企業 | 大学 | 専門家 | 市民 | クリエイター | 地元企業など
「共創・対話・提案・実験」のエンジン

参加・実感・知恵の吸収

制度連携・合意形成支援

パブリックスタンス層

推進協議会・地域住民・自治会
意見共有・対話・可視化の場

行政サポート層

県・市・関係省庁
制度支援・リソース伴走

循環構造

SPO

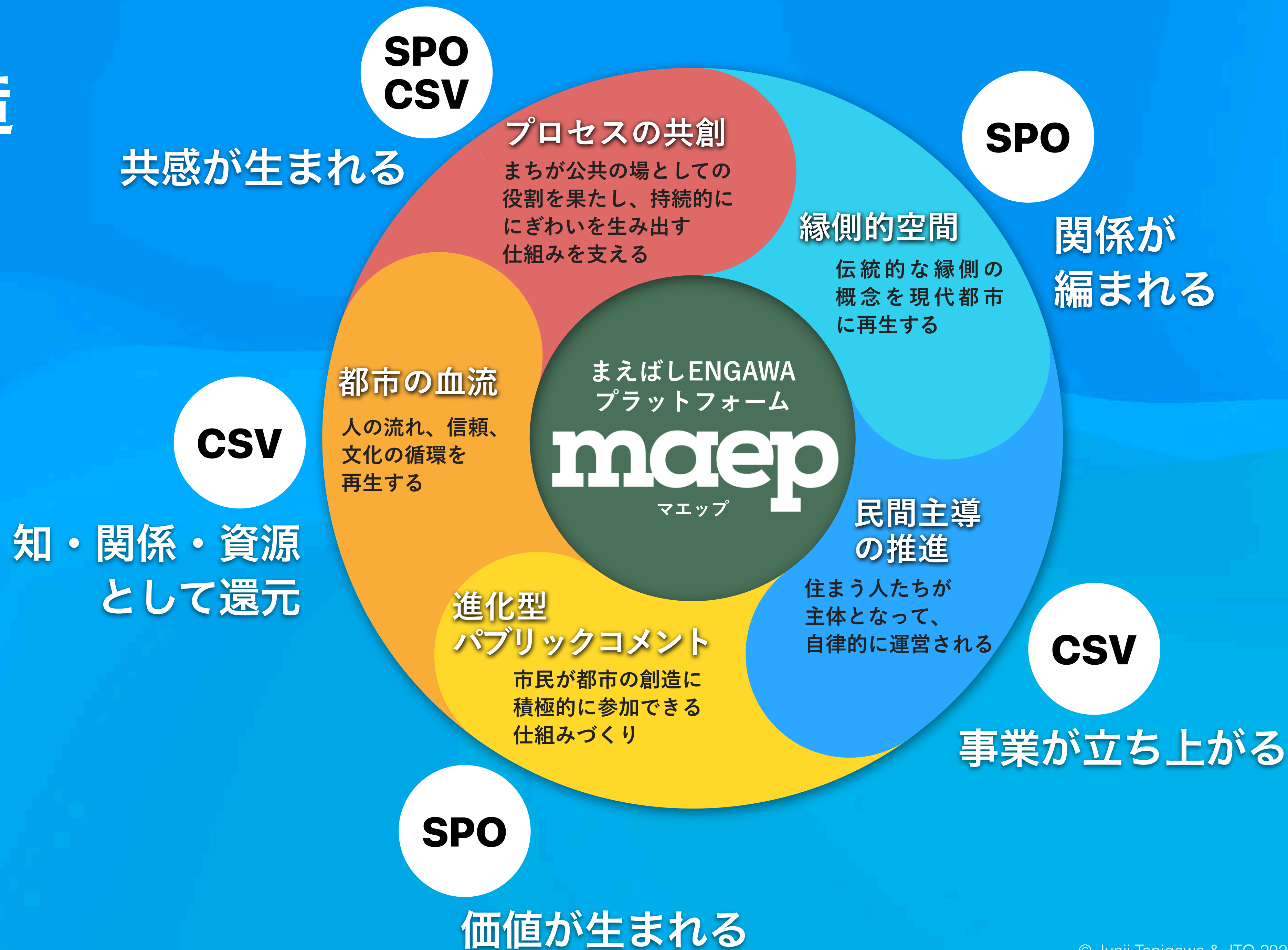


CSV



SPO

の循環



社会OSとしての意義 SPOは“関係のインフラ”。

社会を発酵させる静かな装置。
OSVの成功確率を
劇的に上げる「土壌」となる。

【生活・市民】

日常の生活圏・営み・実感・文化
市民／住民／地元企業／若者

〈暮らしの境界〉

MAEP＝縁側(ENGAWA)

市民・民間・学生・企業・生活者が自由に出入りし、アイデア・対話・学び・試行が生まれる半公共の空間

〈制度の境界〉

政策・都市計画・規制・インフラ整備
専門家／行政職員／技術者

【制度・行政】

企業OSとしての意義

CSVは“価値の実装装置”。

SPOで育った関係性を、
経済価値として現実に変換するエンジン。

統合ビジョン

**SPO × CSV
= Resonant Value Loop**

関係性（SPO）と価値創造（CSV）が
連鎖しながら増幅する「共鳴循環モデル」

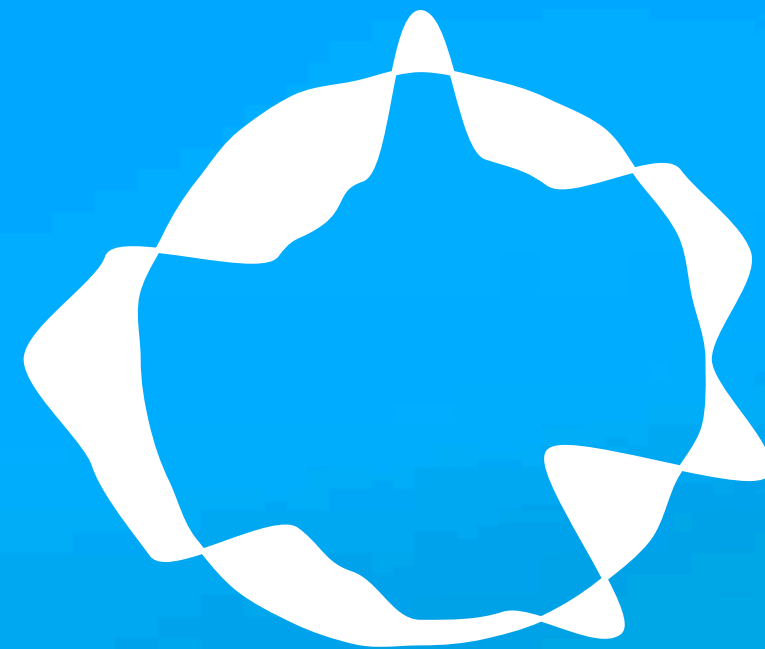
CLOSING

社会は、関係性で動く。

企業は、価値で動く。

未来は、その両方で動く。

ENGAWA力で時代の航海図を描き出す。



**social
platform
academy**